

二〇一四年度

兵庫教育大学大学院学位論文

『細雪』『卍』『痴人の愛』に紡がれる女性のライフイベントとライフスタイル

——その社会批評性を中心に——

教育内容・方法開発専攻

文化表現系教育コース

言語系教育分野（国語）

M13162K

黄 嘉麗

## 凡例

\*『細雪』本文の引用は全て『谷崎潤一郎集』(二)(筑摩書房 一九七九年五月)に拠る。『卍』本文の引用は全て『谷崎潤一郎集』(一)(筑摩書房 一九七九年五月)に拠る。『痴人の愛』本文の引用は全て『谷崎潤一郎全集』第十卷(中央公論社 一九八二年二月)に拠る。引用に際して、旧字は新字に改め、振り仮名、傍点等も適宜省略した。なお、引用文における傍線は引用者によるものである。



第二章 「物資節約」の時代と蒔岡両家	21
第一節 蒔岡両家の暮らしへの視線	21
第二節 分家の贅沢な生活ぶり	21
第三節 本家の「質素節約」の生活ぶり	23
第四節 蒔岡本家と分家の結末	27
第三章 健康と病気をめぐる問題	29
第一節 「健康報国」の時代と『細雪』	29
一、見合い相手の健康の比較	29
(一) 不健康な見合い相手	30
ア、瀬越との見合い	30
イ、野村との見合い	30
ウ、沢崎との見合い	31
(二) 健康な見合い相手	32
ア、橋寺との見合い	32
イ、御牧との見合い	33
(三) 雪子と御牧の健康の不均衡	34
第二節 病気をめぐる問題	34
一、物語要素としての病気	35
二、『細雪』の病と同時代	38

	二、病気の役割	38
	(一) 幸子の病気	38
	(二) 悦子の病気	41
	(三) 板倉の病気	45
	(四) 妙子の病気	48
	(五) 奥畑の病気	50
	第三節 医療事故をめぐる問題	51
	第四節 「強制された健康」と『細雪』	52
	第五節 「病気」という美	54
	一、「病気」の中の雪子	54
	二、蒔岡の母親	55
	三、死産の子供	56
	四、「病気」の中の妙子	56
	第六節 『細雪』における理想的な女性美	58
第四章	国家による性支配下——『細雪』、『痴人の愛』、『卍』における子供をめぐる問題	60
第一節	『細雪』における産児問題	60
第二節	『痴人の愛』における産児問題	63
第三節	『卍』における産児問題	64
第四節	人的資源の量の低下から人的資源の量と質の低下へ	68

第五節 『細雪』における戦争ごっこ	72
第六節 国家による性支配から逃れて	77
おわりに	79

## はじめに

『細雪』は大阪船場の旧家蒔岡家の四人姉妹の生き方を通して、日本の伝統と文化が描かれる物語である。一九四三年一月の「中央公論」に『細雪』の第一回（八章まで）が発表されたが、三月号に第二回（十三章まで）が発表されたところで、連載中止となった。戦後、『細雪』が評価され、谷崎は毎日出版文化賞（一九四七年）や朝日文化賞（一九四九年）を受賞した。『細雪』の研究の主流となっているのは作品の語り論<sup>(1)</sup>、主人公論<sup>(2)</sup>、あるいは『源氏物語』との比較論<sup>(3)</sup>などである。作品の主人公論の中では雪子の永遠美<sup>(4)</sup>を論じるのが代表的である。近年では『細雪』の社会性について指摘されるようになった。『細雪』の「反時代」性について最初に明確に指摘した論考として挙げられるのは、渡辺直己の『「細雪」と八月十五日』<sup>(5)</sup>である。

渡辺は敗戦の歴史的な事象が比喩として作品に流入しているという点に着目し、一九四五年八月十五日の敗戦を迎えた時点で、谷崎が執筆していたであろう箇所を探り、「それが下巻の「五」節冒頭から、「七」節末尾のどこか」であると限定している。この部分は雪子が大垣の富豪沢崎と見合いをし、先方から断られて、縁談が不成立に至ったところである。これまでの縁談は全部蒔岡家の側から断っていたのに、初めての屈辱を受けたわけである。渡辺は「雪子はつまりここで、これ以上なく露骨に、無条件降伏を強いられてあることになるだろう」と、同時代の歴史との照応を読み取っている。

さらに、渡辺は六節の後半、一人東京に向かう列車の中での雪子の描写に着目した。「たった一人の雪子の姿が、他の誰の視線も介さず、作者によってじかに描写されている」と言う。作中では、幸子を語り手とするのが一貫した書き方であるが、例外中の例外として、はじめて雪子の内面を描いた。対応関係を考えると、天皇体系の歴史上、例外中の例外として、昭和天皇の玉音がはじめて「公然と晒け出された」。

渡辺は谷崎の仕掛けた雪子をめぐる二重の例外は歴史の事象と照応して、天皇が愛惜すべき日本を決定的な破壊に

導いたまま、「あの声を境にさつさと別のものにすがたを変えてしまった存在にたいする、いわば無意識の不敬罪に似た何か」と結論付けた。

柴田勝二(6)は渡辺直己の論を踏まえた上で、作者が歴史的な事象に強く向かうことによって、雪子と妙子に、時間  
に照応する寓意が託されると述べた。渡辺は単に雪子に注目したのと相違し、柴田は妙子のほうにも重点を置いた。  
柴田は西洋と日本、近代と伝統の双方を共在させつつある妙子の姿が近代日本の道行きそのものの表象だと述べた。  
水害の危険に晒された妙子の事態が、日本という国が太平洋戦争に晒されている状況の危うさと照応する。板倉が妙  
子を水害から救い、妙子の死に至るべき運命を引き継いでしまう。彼は後の章で黴菌に侵され、戦場で苦しむ兵士の  
ように、激痛に悶絶しながら、息絶えた。柴田は意識的に位置づけられていた敗戦の表象としたものは、板倉の悶死  
だと述べた。

それに、柴田は敗戦に続いて一九四七年元日に天皇が「人間宣言」をすることによって、自身の神としての幻想性  
を自ら否定し、こうした幻想性の幻滅は『細雪』の雪子、妙子の身に起こる「幻想の剥落」と照応していると読み取  
ろうとする。雪子は「旧家の美しい令嬢」という幻想を引き剥がされ、「容貌の衰えつつある三十過ぎの箱入り娘」と  
いう否定的な規定の中に投げ込まれてしまう。一方、下巻で繰り返されるこの幻想の剥落は妙子をも襲っている。経  
済的に自立して生活しうる女性という幻想は、下巻で妙子もまた男に依存しつつ生きる前近代的な女性の一人にすぎ  
なかつたということが示唆された。

中巻で語られているドイツに帰国することを決めたシュトルツ親子を雪子が東京見物の案内をする様相は、戦時中  
の日独同盟関係を反映していると柴田は読み取ろうとする。雪子がシュトルツ親子を案内するのは帝国ホテルに始ま  
り、陸軍省、帝国議会、首相官邸、海軍省、司法省といった、「国家的な性格の露わな建築物ばかり」である。外国語  
が上手でない雪子との間に円滑な意思疎通がなされたと思われず、幸子はシュトルツ親子が「言葉の通じない不自由  
さを忍び、絶えず気にして腕時計を見ながら、黙々として引つ張り廻されたであろう」と推量した。ドイツとの協力



同盟関係は一九四四年の時点で有名無実のものとなっていたが、それが日本人とドイツ人の家庭の交流の様子に噛み合わない一面として表現されると柴田は考えた。

小泉浩一郎(こ)は『細雪』の中軸をなすモチーフに近代天皇帝への批判を読み取り、「谷崎固有の女性原理的な天皇制や女性原理的な家のイメージを以て、実体としての男性原理的な近代天皇帝や家制度を撃った」と述べた。女性原理に導かれたエロスの構図は近代天皇帝の武士的暴力性を批判的に対象化する。

『細雪』については、小泉は渡辺、柴田と違い、『細雪』の主軸が幸子にあり、幸子が主宰する蒔岡分家という空間を「関西天皇帝空間」と名づける。長女鶴子の夫辰雄が丸の内の銀行の支店長への就任によって、東京へ拠を引き移った蒔岡本家の空間を男性原理を中核とする「日本近代天皇帝」、「東京天皇帝空間」と呼ぶ。『細雪』は「関西天皇帝空間」によって、「東京天皇帝空間」を「相対化しようとした芸術的試み」と小泉は論じ、作品空間の隠喩性に重点を置いた。

谷崎の社会批評性については、渡辺と柴田は『細雪』の出来事が、同時代の新聞記事を相対化するものとして設定され、ニュースと連動した小説が作られていると述べている。小泉の着目は谷崎作品の女性中心原理的な構図と近代天皇制の男性原理的な空間との逆転である。

本論文の目的は、『細雪』における女性のライフイベントとライフスタイルを考察対象とし、「早婚多産」を強い、「贅沢は敵だ」と唱え、「健康報国」を強制する時代背景と照らし合わせながら、『細雪』の社会批評性について検討を加えることにある。さらに、『卍』、『痴人の愛』の産児問題を手がかりに、『細雪』の産児問題を検討する。これは谷崎の軍国主義批判につながるだろう。

(1) 中村邦夫「『細雪』の語りと表現」(『表現研究』第六〇号 一九九四年九月)、佐藤淳一「『生活の定式(じようしき)』と美意識——谷崎潤一郎『細雪』の表現形式の分析から」(『国語と国文学』第八一卷第七号 二〇〇四年七月)などがある。

(2) 高田瑞穂「細雪」(『国文学解釈と鑑賞』第四八巻第八号 一九八三年五月)、野村圭介「細雪四姉妹」(『早稲田商学』第三三七号 一九九〇年三月)、塚本康彦「細雪」(『国文学解釈と鑑賞』第五七巻第二号 一九九二年二月)、川本三郎「モダンガールの四女、妙子」(『中央公論』第一二二巻第十号 二〇〇六年十月)などがある。

(3) 丸野弥高「細雪と源氏物語」(『国文学解釈と鑑賞』第一八巻第八号 一九五三年八月)、山口仲美「谷崎潤一郎『細雪』の表現——『源氏物語』の影響」(『表現研究』第六〇号 一九九四年九月)などがある。

(4) 千葉俊二「谷崎潤一郎『細雪』の雪子」(『国文学 解釈と教材の研究』第二五巻第四号 一九八〇年三月)

(5) 渡辺直己「『細雪』と八月十五日」(『新潮』第八六巻第一号 一九八九年一月)、三三三頁〜三三五頁に拠る。

(6) 柴田勝二「表象としての〈現在〉——『細雪』の寓意——」(『日本文学』第四九巻第九号 二〇〇〇年九月)、三一頁〜三九頁に拠る。

(7) 小泉浩一郎「谷崎文学の思想——その近代天皇制批判をめぐって——」(『国語と国文学』第七八巻第三号 二〇〇一年三月)、三頁〜五頁に拠る。

## 第一章 晩婚少産の話

### 第一節 「早婚多産」の社会における『細雪』

#### 一、「晩婚」としての物語

##### (一) 雪子の晩婚の記号——「染み」

『細雪』は三十歳を過ぎて、まだ身を固めていない雪子の見合いを軸に展開する物語であることは言うまでもない。雪子は五回の見合いを経て、最後に華族の御牧と巡り合う。物語は一九三六年十一月から一九四一年四月まで、雪子の見合い話がメインプロットになっている。三十歳を過ぎた雪子が、まだ結婚できないことに始まり、ようやく三十五歳の年に、御牧との縁談がまとまることによつて、六年という時間の累積にピリオドが打たれる。蔭岡家は、というより、幸子や貞之助は早く雪子を嫁がせるために雪子の見合いを様々に斡旋した。にもかかわらず、事実としては雪子が三十五歳にして初めて結婚できたことに注目しよう。

作品の中で、雪子を始め、幸子、妙子は実際よりも十歳前後若く見えることが反復して強調されているものの、雪子の目の縁の「染み」(1)は結婚適齢期を過ぎた記号として描かれる。雪子の顔の染みはホルモンのバランスが崩れたことから起こるものであり、「適齢期を過ぎた未婚の婦人には度々ある生理現象で」「大概の場合、結婚」すれば、「直ちに直るものだけでも、さうでなくても、女性ホルモンの注射を少し続けられても治癒することが多い」と診断が下される。

雪子の「染み」は以前は月の病気の前後に濃くなる傾向があり、大体周期的に現れるようであった。しかし、その「染み」は次第に不規則になり、いつ濃くなるとも薄くなるとも予測が付かなくなった。幸子と貞之助は目障りになる程の欠陥とも感じたが、雪子本人は一向にその「染み」を気に病んでいないように見せ、いつも通りに化粧を厚く

施す。しかし、彼女の厚化粧は表面を美しく取り繕うどころか、身体の中から浮き上がってくる「染み」が一層はっきりと際立っている。厚化粧をすると、「染み」がお白粉の下地から浮き上がって、斜めに見る際に、体温計の水銀のような跡がはっきりと分かるのだ。

作品において、谷崎は筆を費やし、雪子の「染み」を書いている。雪子は自分の「染み」に無頓着に振舞っているが、その「染み」は幸子と貞之助にとっては不安を感じさせるものであり、見合いの席で相手の男に「染み」がどう映るのか、気になるものだった。幸子は見合いの前に、雪子の仄かな「染み」に胸を暗くする。その「染み」が幾分でも薄くなるように祈っていたが、生憎沢崎との見合いの前日から濃くなってしまった。雪子は例の如く、その「染み」に無関心で、厚化粧しようとした。幸子はその「染み」を巧い具合に誤魔化そうとし、化粧の拵えを手伝ったが、お白粉を薄くさせたり、頬紅を目の下にひろげさせたりという工夫では、誤魔化し切れなかった。

雪子の「染み」は見合いの席で幸子をヒヤヒヤさせた。この雪子の「染み」を結婚適齢を過ぎた記号、あるいは晩婚の記号として考えてみたい。『細雪』の物語の現在と、作者の執筆している時間の間には、六年前後のズレが存在する。『細雪』の物語は一九三六年の十一月に始まっているが、谷崎潤一郎は一九四一年の十一月から『細雪』を書き始める。一九三六年に女子の平均結婚年齢は23.9歳<sup>(2)</sup>だった。政府は人口を増加するために、早婚を奨励した。一九四一年一月、閣議は「人口政策綱領」を決定した。「人口政策綱領」は総力戦体制での人的資源の確保を目的とした人口政策である。永続的な人口増加とその資質の向上が必須の課題であるとされ、一九六〇年には総人口を一億人にする目標を掲げている。<sup>(3)</sup>

出生の増加のために示された具体策は、結婚年齢を今後一〇年間に現在の平均より三年早めて一夫婦の出生数を平均五人とすることであった。一〇月、厚生省は男子は二五歳、女子は二一歳までの結婚奨励を地方長官あてに指示している。過去における統計から計算して、女性が二一歳で結婚すれば一夫婦五人の子どもをもてるとし

た。そして、女性が早く結婚するように国民がお互いに協力しあうこと、母性をもつ国家的使命を認識させるため、女子教育を徹底すべきことが説かれた。(4)

当時の女性の平均結婚年齢は23.9歳であるが、政府はこれを三年早くし、二十一歳までに結婚するよう女性に勧めた。その理由は国家の人口増加政策にある。

出生増加のために政府が呼びかけた具体策は、女子の平均結婚年齢を三年繰り上げること、一夫婦平均五子をもうけることである。個人の結婚が国家政策に組み込まれ、国家政策のもとで存在する母性しか許されなかった。国家は「立派な戦士を捧げましょう」などをスローガンに女性たちを動員し、健康な子供を多く育てることを求めた。要するに、多産を前提とした結婚の奨励こそが、人口増加政策の原点であるとされたのである。

一九三九年九月三十日、厚生省は結婚を指導する方針——「結婚十訓」(5)を作り、「成るべく早く結婚せよ」、「生めよ育てよ国の為」などを女性達に奨励した。

一生の伴侶として信頼出来る人を選べ。

心身共に健康な人を選べ。

お互に健康証明書を交換せよ。

悪い遺伝の無い人を選べ。

近親結婚は成るべく避けよ。

成るべく早く結婚せよ。

迷信や因襲に捉はれるな。

父母長上の意見を尊重せよ。

式は質素に届けは当日に。  
生めよ育てよ国の為。

「成るべく早く結婚せよ」が奨励された時代においては、三十五歳にして初めて結婚する雪子は異例である。平野芳信(6)は、雪子と妙子がなかなか結婚することが叶わぬのは、雪子をはじめとして、蒔岡家の娘たちが神に仕える巫子的存在か、あるいは季節の巡行を司る時間の支配者の美しい花嫁像を持つからだと言ひ取らうとした。雪子たちの結婚が遅くなるのは、谷崎が『細雪』のキャラクターを作る時に、戦時体制と異なる世界を作ろうとしているために生み出される存在だったからだと言ひべきだろうか。当時の政府は、国家のために早く結婚し、子供をたくさん産めと女性に要求している。個人の結婚、出産が戦争遂行のための兵力、労働力確保という国家政策に組み込まれたのだ。しかし、『細雪』は「結婚報国」の名で早婚が奨励された社会環境に背を向けるかのように、丹念に三十歳を過ぎた雪子の縁談話をだらだらと重ねていく。瀬越、野村、沢崎のような不健康・不健全な人を雪子の見合い相手として出現させるのは、雪子を晩婚にさせるファクターにもなるだろう。

## (二) 妙子の晩婚

雪子が晩婚になることは言うまでもないが、実は妙子も晩婚であった。蒔岡家が雪子の見合いに全力をあげている一方、雪子より四、五歳年下の妙子も三十、三十一歳くらいにして、バアテンダア三好の子を身籠もっていた。妙子は物語の始まる時、二十五、六歳とされるが、物語の時間は一九三六年から一九四一年までの六年間である。一九四一年に妙子の死産する時には彼女は三十三、三十一歳くらいと推測できよう。三好の前にいた妙子の恋人は板倉である。強健な体、実力を持ち、自分を愛してくれる板倉と新しい生活をスタートしようと思ひ、妙子は板倉との結婚を考え

るようになるが、その板倉は急死してしまう。「平素から頑健な、殺しても死にそうもない」板倉だが、谷崎は板倉の急死を設定した。望んだ結婚相手がいなくなったことで、妙子を晩婚に近づかせる。ほかに、妙子が引き起こしたスキヤンダルは、雪子の婚期が遅れる原因のひとつにもなっているが、本人の結婚にも悪い影響を及ぼす。『細雪』は雪子と妙子の晩婚を描く物語だと捉えることができそうである。早婚が奨励される時代に、谷崎は晩婚の物語を六年もかけて執筆したのである。

## 二、「少産」としての物語

### (一) 雪子の出産の可能性

『細雪』の末尾で汽車に乗り、結婚という新たな旅立ちに向かう雪子は、葉も利かないしつこい下痢に見舞われる。『細雪』において、雪子はこれまで眼の縁に「染み」が出ながらも、病気らしい病気をしないばかりか、家族が猩紅熱、赤痢という病気に冒された時には、優れた「看護」人の役割を發揮したことは繰り返し強調されていた。すなわち、これまで病気から遠ざけられて描かれてきた雪子に対して、雪子の下痢(こ)は作品の末尾にして初めて現れた異例の出来事である。

雪子を見た目は弱々しいが、幸子や妙子と相違し、「消極的な抵抗力は最も強く、家ぢゅうの者が順々に流感に感染するやうな時でも彼女だけは罹らずにしまふと言ふ風で、今迄つひぞ病気らしい病気をしたことがなかった」という。雪子は精神的にも体質的にも堪え性があり、病気の看護に限らず、悦子の周りの世話役に向いている。母親の幸子がする役を自分がさせてもらえることを喜びと感ずる。精神的にも体質的にも母親役に向いている雪子が婚期に遅れるのだ。

それに、縁談がまとまってから下痢をし続ける意味は、これまで幾度も強調されてきた雪子の健康な体質が変化し

たということだろう。雪子は既に三十五歳を迎えるため、妊娠率が下がる。たとえ、妊娠できても、流産、死産する可能性も高まり、母体や胎児に与える危険性は大きい。二人目、三人目の出産が難しくなる。要するに、作品世界で雪子は、婚期が遅れたために、現実社会で要求される女子の役割——早婚多産を到底果たせなくなっているのである。作品末尾の下痢は結婚するその先にある雪子の健康だったはずの身体的なものに大きな不安の影を落としている。年齢的には年が行っているし、下痢から推測し得る弱くなった体質から見れば、雪子が子供を産める可能性は低くなるだろう。

## (二) 出産にまつわる出来事

### ア、出産へのまなざし

東郷克美(8)は幸子・雪子・妙子三姉妹の子供を産まないという「不毛性」について指摘した。幸子には悦子という一人娘があるが、久々に妊娠した子は流産してしまうし、雪子は結婚の相手に恵まれない。そして妙子は死産をする。子供を産まないという「不毛性」を、三姉妹を制度化された美の枠の中で生きる「人形」ような存在だという理由から、三姉妹は真の肉体を所有していない、ないしは衰弱した生命しか持っていないと結論付けた。そのため、東郷は『細雪』における子供を産まないという「不毛性」を描いているのは、蒔岡家が衰亡する物語を描いているからだとし唆した。

丸川哲史(9)は幸子の流産と妙子の死産を、「富国強兵」に抵抗するものと関連付けた。時代の流れは、産まれてくる子供は富国強兵的な有用性に奉仕させたり、死の強制を忠孝に昇華させたりしようとした。丸川は幸子の流産や妙子の死産は、「富国強兵」の時代に産み出された子供の死を宣告する証拠だと読み取るうとする。

東郷は、蒔岡の長女である鶴子が六人の子供を産んだことについて触れていなかった。本論文では子供の意味につ



いて検討してみたいと考える。特に、子沢山の姉鶴子と子供を産まない／産めない妹三人とを対照させた谷崎の意図について考察する。この作品において、子供が担っている役割を考える時、鶴子と妹三人とが意味深い対照を成していると言わねばなるまい。

東京に住む蒔岡家の長女鶴子は、子供を六人も産んで、自分の手一つで育てているのに、幸子はたった一人の女の子の面倒さえ十分にすることができず、雪子の手を借りている。また子供を産みたいにもかかわらず、流産という目にも遭う。結局幸子は悦子という子供一人しか持っていない。雪子は子供好きで、子供の世話係としても適任で健康な体質を持っているが、三十五歳にして初めて結婚できる。縁談がようやくまとまるようになるが、下痢を続ける目に遭う。下痢から推測した弱くなった体質から見れば、雪子が子供を産める可能性が低くなるだろう。妙子は三好の子を身籠もっていたが、死産という目に遭う。

出産の事情に関しては、鶴子はすつかり「生めよ育てよ国の為」という体制の協力者のように描かれているが、妹三人は子供を生みたい／結婚したいという本人の意志に反し、戦時体制が要求することとは相違するプロットに置かれる。

丸川は幸子の流産・妙子の死産を富国強兵への反発だと論じている。丸川は単に幸子の流産・妙子の死産の設定を指摘しただけで、猫の多産や赤ん坊を産むという悦子の飯事遊びなどの設定には触れていなかった。赤ん坊を産むという悦子の飯事遊び、幸子の流産、猫の多産、妙子の死産が単なる事実に留まらず、作品内に対比されたり、構造化されたりしているように配置されていることは論じられていない。本論文では『細雪』に構造化されたこれらの事実の関連性にスポットを当て、「早婚多産」を奨励した権力の意向に反する性格が顕在化することをあきらかにしたい。

『細雪』において、鶴子の多産・赤ん坊を産むという悦子の飯事遊び・幸子の流産・飼猫の多産・妙子の死産というように、出産にまつわる出来事が五つ見られる。この五つの出来事は単なる作品に散在する事実にと留まらず、深い関連があるように描かれている。

蒔岡家の長女鶴子は妹三人に比べると、作品に登場する場面が少ない。大正末頃一九二二年に、鶴子は婿を迎え、大阪の上本町に住んでいた。子供が六人もいて、家事と子育てに忙しいため、幸子の住む芦屋分家に遊ぶに行く余裕はなかった。「来てもほんの一二時間、家事の相間を見て来るだけであつた」。夫辰雄が先祖代々の家業を辞め、銀行員の仕事に就くため、生活に昔の榮華が消えて、苦勞し始める。

一九三七年に夫辰雄の転勤で大阪から東京に引越して行った。中巻十五の一九三八年のところで、鶴子は三十八歳になって、十五を頭に、十二、九つ、七つ、六つ、四つという六人の子女の母親である。六人の子供と夫の世話をしなければならぬのに、女中を一人しか使っていない。子供の数が増え、生活費が高む一方で、暮らし向きは昔のように楽ではなくなる。渋谷で粗末な家を借りて暮らしている。子供たちのため、何処の部屋も乱雑にされ、足の踏み場もないくらいに取り散らかされている。谷崎が一九四一年に『細雪』を執筆した。その前の年一九四〇年に閣議は一夫婦の出生数として平均五人を求めている。一九四〇年から厚生省は優良多子家庭表彰を行っていた。鶴子の多産は、社会の影響がもたらした行為だと察せられるだろう。鶴子の多産は幸子の流産・妙子の流産と対比的に語られていく。

## ウ、悦子の飯事遊び

幸子の娘悦子と隣のドイツ人の娘ローゼマリーが、人形を操って飯事をする場面がある。彼女らは男の人形と女の人形を接吻させて、「ベビーさん来ました」と言いながらママの人形のスカートから赤ん坊の人形を取り出す遊びを繰

り返した。

ローゼマリーが、

「これ、パパさんです」

と、左の手に男の人形を持ち、

「これ、ママさんです」

と、右の手に女の人形を持つて、両方から顔を押しつけては、口の中で「チュツ」と舌を鳴らしてゐるのが、

最初は何をしてゐるのやら分からなかつたが、なほよく見ると、二つの人形に接吻させてゐるのらしく、自分で

「チュツ」と舌を鳴らすのはその音のつもりらしいのであつた。とローゼマリーは又、

「ベビーさん来ました」と云ひながら、ママの人形のスカートから赤ん坊を取り出した。そして、何度も一つこ

とをして、

「ベビーさん来ました、ベビーさん来ました」

と云ひつゞけるので、(略)(上巻十八)

子供は発達していく過程で、自分が見たり、聞いたたり、具体的に経験した大人の世界をごっこ遊びに取り入れていく。ある意味で、子供のごっこ遊びは、大人社会を再現することにもなるだろう。昭和十年代の子供たちが人形を使って、ママの人形のスカートから赤ん坊を取り出すことを繰り返すのは、日本中を席卷した時代の有り様と関連するだろう。伯母の鶴子は時代の要求に応じ、子供を六人も産んだ。母の幸子は流産したにせよ、再び子供を産みたいと願っていた。蒔岡家の姉妹も、子供をたくさん産めと喧しく叫ばれた時代の流れに乗っている。悦子は身の周りにいる大人の行動を模倣し、遊びに取り入れるのだ。炊事・食事・洗濯・買い物・接客など日常的な行為を真似するのは

普通だと思われるが、子供を産むという悦子とローゼーマリーの遊びは、「産めよ増やせよ」をスローガンとした時代に影響されていると言っても差し支えないだろう。

悦子たちが赤ん坊を産む飯事をしている場面から、彼女たちは赤ん坊が簡単に産まれると思っていることとして捉えられよう。人形に接吻させたなら、お腹から子供を産めると悦子たちは考えている。当然、子供である悦子たちが、子供を産む手続きを複雑に考えるはずはない。しかし、人間である以上、出産までに踏む時間や精力は欠かせない。後の幸子の流産や妙子の死産などを考えれば、妊娠・出産により、女性の身体は虚弱になるばかりでなく、死の危険すらある。

出産を簡単に済ませるこの場面（上巻十八）と、子供を産む度に危機に晒される幸子の流産（上巻二十七）や妙子の死産（下巻三十七）とが意識的に対比されている仕組みが窺えるだろう。この三つの場面の前後関係を考えれば、子供は簡単に産めないし、女性は命の危機に晒されるのである。幸子は姉鶴子が子沢山のことを羨ましく思い、悦子の次の子供を産みたいが、その願いが簡単に叶わず、流産してしまった。妙子の出産も悦子の飯事のように、子供を簡単に産めず、死産に至ったのだ。

## エ、幸子の流産

子多福の蒔岡家の長女鶴子と違い、幸子は悦子を産んでから、十年近くも妊娠していなかった。幸子は子供を産みたいと思っているが、手術しないと子供を産めないと医者に言われた幸子は妊娠しても、自分の不注意のため、流産することになる。幸子は流産のせいで、顔は「血の気の失せた青白」い顔になり、「裏れが目立ってゐることを感じた」。流産は、幸子に生理的障害をもたらしただけでなく、精神的なダメージももたらす。作品には流産した後、一ヵ月後、一年後という節目節目に流れた赤ん坊のことを思い出す幸子の様子が描かれている。

大方此のことが一生癒やし難い悔恨となつて付き纏ふであらう。……そして幸子は、もう一度強く己れを責め、夫と、失はれた胎児とに償ひやうのない罪を犯したことを謝しつつ、又しても新たな涙が一杯溜つて来るのを感じた。(上巻二十七)

京都では貞之助が、花見の雑沓の間にあつても、赤児を抱いた人に行き遇はず毎に幸子のはつと眼を潤ませるのに当惑したが、そんな訳なので、今年は夫婦が後に残るやうなこともせず、日曜の晩に皆一緒に帰つて来た。(上巻二十九)

子供を産むのは、容易ではなく、さらに流産が、母体に与える精神的傷害は図り知れないと言つてもよいだろう。幸子は自分の油断を責めながら、夫と失われた胎児に「償ひやうのない罪を犯した」ように感じ、この罪悪感は一生涯伴うと悟つた。「赤児を抱いた人に行き遇はず毎に幸子のはつと眼を潤ませる」という描写は、流産に悩む憐れな母親の嘆きを如実に表したと見てよいのではなからうか。流産が幸子にもたらした精神的なダメージは容易に回復できないのである。

## オ、妙子の死産

『細雪』において、子供を産むのが容易でないもう一つの事件は、妙子の死産の話である。妙子が身分違いの三好の子供を身籠っているのを世間の人に知られたら、蒔岡家の家名を汚すことになる。それを避けるため、幸子の夫貞之助は本人同士の承諾を得て、妙子を人目に付かないところに隠そうとする。有馬温泉あたりの旅館で蒔岡の姓を隠

し、何処かの夫人が療養に來ている体裁で宿泊させる。妙子は臨月まで有馬で滞在したが、お産になると、密かに神戸の然るべき病院に入院するようになった。入院の翌日、付き添いの女中お春は胎児が逆子になっている旨を幸子に告げた。

妙子のお腹の胎児が逆児になったことにより、呻ったり、嘔吐したりする。妙子は苦しくてとても助からないと思ひ、泣いていた。子供を産むことは母体と胎児、ともに危険が伴う。二十時間も陣痛で苦しがつており、医者は国産の促進剤を注射した。しかし、あまり効き目がなく、陣痛が微弱のまま、スムーズに出産できない。幸子は貴重品の秘蔵薬を差し出す代りに、院長にドイツの陣痛促進剤を出してもらうように泣き落とした。院長は渋々にたつた一つ、取っておきのドイツの陣痛促進剤を出して、妙子に注射した。注射して五分後、忽ち陣痛が起り始める。ドイツの製品が国産品に比べて、なんと優秀であろうと幸子は感心した。良いドイツの陣痛促進剤に恵まれ、妙子はその後分娩室へ運ばれていく。

しかし、妙子が異常な苦痛を耐えても、赤ん坊は泣き声を立てることなく、死児となった。死んだ赤ん坊を見て、妙子が激しく泣き出した。悦子の飯事遊びのように、子供を簡単に産めない。一時ドイツ製の良い薬が払底しているため、妙子は二十時間の微弱の陣痛に堪え続けた。良い薬が不足する時代に、妙子は命の危険に晒されたのだ。

## カ、飼い猫の多産

悦子は飼い猫のお鈴を可愛がっている。食事の時、脚下に置いていろいろの物を与えるのである。上巻二十四に悦子は神経衰弱のため、食欲がなく、油っぽいものを全部お鈴に遣ってしまう。お鈴を描く場面はこれぐらいである。それ以降お鈴はほとんど登場しない。しかし、下巻三十七に妙子の死産の描写の先に、お鈴は再び登場し、その多産が詳しく描かれている。

飼猫は年を取っていて、どうも自分の力で産めず、陣痛促進剤を注射された。幸子と雪子はお鈴のお産を手伝い、三匹の仔を首尾よく分娩させた。下巻三十七の前後に飼猫が三匹の仔を無事に分娩したと、妙子が死産したことが設定されている。動物の多産と人間の死産が対比的に書き込まれているように考えられよう。谷崎は当時の国策「産めよ増やせよ」は、女性を種馬、種牛のように見做していると、代弁させているのであろう。動物の猫は生殖力が旺盛で、子をたくさん産める力を持っている。人間は子供を産む数が動物より限られている。流産や死産などは親たる者が堪えられぬ苦痛を受けることなのであるが、それをあたかももののように、為政者が多産を奨励した。戦時体制の強化が進む中で、人的資源を確保するため、女性を人口増殖の戦士として求める。谷崎は猫と妙子が各々分娩することを同時に下巻三十七に書いたのは、谷崎がある意図を施したからではないか。為政者が女性を野生動物と同一視する誤謬に陥いたことを風刺する意図を暗示していると言つてよからう。

### 三、「晩婚少産」と同時代

悦子とローゼマリーの飯事——人形に接吻させるだけで、「ベビーさん来ました」という遊びが何度も繰り返された。妊娠と出産が簡単に済ませられるという考え方は、幸子の流産や妙子の死産と巧みな対照を成している。鶴子の多産はまさに「産めよ増やせよ」の現れであろう。国家は女性を生殖動物と見做し、子供をたくさん産めと女性に義務付ける。女性の肉体的・精神的損失に目を配らなかつた。幸子と妙子は、子供の死により多大な苦痛を抱え込んだ。この出産に関わる五つの事件は作品内で対比されたり、構造化されたりするように配置されている。

「早婚多産」が奨励された時代に、雪子・妙子は「早婚多産」の協力者のようにも描かれておらず、それは戦時体制に対して抵抗する要素を帯びてくる。政府は女性を、種族を孵化する産児機械の役目だと見ていた。谷崎は当時の国家の性支配に対して、異なる世界を『細雪』において築いた。一九四一年に閣議決定された人口政策確立綱項に基

づくスローガン「産めよ増やせよ」は当時の人口政策として唱えられたが、谷崎が『細雪』で作ったプロットは、明らかに国家による性支配の人口政策から逃れていると見てよいのではなからうか。

## 注

(1) 東郷克美は「『細雪』試論——妙子の物語あるいは病氣の意味」(『日本文学』第三四卷第二号 一九八五年二月)で雪子について、「ほとんど人形に近い存在として描かれていて、もつとも肉体性が希薄だ」と指摘し、雪子の「染み」によって彼女の「肉体的・生理的存在」であることを表現していると評した。

雪子の「染み」が女性ホルモンを注射すれば、治ることが多いという所に、注射の役割について、村瀬士朗は「代謝する身体の物語——生命現象としての「細雪」」(『国語国文研究』第八七号 一九九〇年十二月)で「注射をするという行為は結婚することの代用行為なのであり、極めてセクシュアルな意味」を持つていと述べた。

丸川哲史は「『細雪』試論」(『群像』第五二巻第六号 一九九七年六月)で雪子の顔の染みを「性的メタファ」と読み取り、性生活の始まりによって解消されるこの「染み」は「非常にエロティックな道具立て」になっているとした。さらに、丸川は雪子の「染み」の役割を以下の二つにまとめた。第一に特権的な記号として作動しているものであり、その染みは蒔岡の運命にとつての不吉な(傷)なのである。第二の役割はこの「染み」は何よりも雪子が「売れ残り」として描かれている。雪子を包む「きらびやか」な着物や化粧は、顔の染みによって、「一挙に引き裂かれ、女性としての商品価値が無効化される恐怖」が「売り手」である幸子と貞之助を襲うということにある。

丸川は幸子や貞之助を「売り手」として見、雪子を彼らの売るべき「商品」として眺める。それゆえ、雪子の染みを商品の傷のように捉え、この染みによって、雪子が値崩れ



てしまう。

東郷や村瀬や丸川らは雪子の「染み」を肉体的、あるいは性的存在であることが共通する。雪子は結婚適齢期を過ぎたため、ホルモンバランスが崩れて、「染み」を起こした。結婚すれば、この「染み」が自然に消える。「染み」が出ている間に、雪子が結婚していない。それゆえ、本論文では、この「染み」を結婚適齢期を過ぎた記号、あるいは、晩婚の記号として考察する。

(2) 『国勢調査集大成 人口統計総覧』（東洋経済新報社 一九八五年十月）、八五五頁に拠る。

(3) 歴史教育者協議会（編）『学びあう 女と男の日本史』（青木書店 二〇〇四年十月）、一七一頁に拠る。

(4) 前掲注（3）に同じ。引用は一七一頁〜一七二頁に拠る。

(5) 結婚十訓の内容は徳積重遠の『結婚訓』（中央公論社 一九四一年十月）の目次に拠る。

(6) 平野芳信『細雪』再論：西洋と日本のはざま（『日本文芸論集』第一五巻 一九八六年十二月）、二七五頁に拠る。

(7) 雪子の下痢について笠原伸夫は『谷崎潤一郎——宿命のエロス』（冬樹社 一九八〇年六月）で雪子の下痢を「緩やかにめぐる蒔岡家の四季、身についた生活のリズム、そのような定形からいまこそ訣別しなければならない、という痛覚のゆえに起るのであって、きわめて過敏な心理的反応」と指摘している。

東郷克美は（前掲注（1）東郷の論文に同じ）「この病気は結婚生活への不安を示すものであると同時に、雪子が蒔岡家の人形的存在から解放され、初めて個としての肉体をとりもどしたことを物語るものにはかならない」と指摘した。

平野芳信は（前掲注（6）に同じ）雪子の下痢が、それまで仕えていた神の子の流産ないしは死産の暗喩（メタ

ファ)だと指摘する。雪子はこれを契機とし人間界に戻り、人間としての「真に個人的な時間」を獲得し——現世の男性との結婚生活に足を踏み入れることができるのである。

中沢千磨夫は「時間の病い／癒しの時」(『国語国文研究』第八七号 一九九〇年十二月)で東郷と同じ考えのもとで、下痢は雪子の行き先への不安を示すものと見られる。さらに、中沢は下痢が止まらないながらも、あえて汽車に乗っていくことは、かつての雪子ならば、下痢を押して旅立つことなど、到底考えられないと言ひ、「雪子は、行先への不安を抱えながらも、と言うより、その不安とともに、御牧に身をゆだねる決意」したものと述べた。

丸川哲史は(前掲注(1))丸川の論文に同じ)幸子や妙子の周りに繰り返し「取り上げられて来た流産の血や赤痢、死産の逆子、嘔吐物、糞便などの(汚物)——すなわち女性の身体と性にかかわる過剰性に雪子もまたこれからはまみれ、巻き込まれて行かざるを得ないことがクライマックスの『下痢』によって明示されている」と指摘した。

笠原、東郷、平野、中沢、丸川らは下痢には雪子が男性(性、肉体)と関わるようになるという意味があると論じた。下痢によって、雪子は夫婦生活が始まるというニュアンスを持っているが、着目したいのは作中で繰り返し強調された雪子の健康な体質が結婚(男と関係を持つこと)を契機に、変化してしまうというところである。本論文では下痢が結婚の先にある、子供を産む雪子の健康に不安の影を落としている機能を考察する。

(8) 前掲注(1) 東郷克美の論文に同じ。引用は七七頁に拠る。

(9) 前掲注(1) 丸川哲史の論文に同じ。引用は一三四頁に拠る。

## 第二章 「物資節約」の時代と蒔岡両家

### 第一節 蒔岡両家の暮らしへの視線

『細雪』は一九四一年に書き始められ、一九四二年に『中央公論』から掲載されたが、その第二十回で取り止めになった。いわゆる「非常時」にあたって、「個人主義的な女人の生活をめんめんと書きつらねた」この小説は掲載禁止になった。<sup>(1)</sup>近年では谷崎は言論統制を受けたことを理由として、『細雪』は「反時代」的な物語として指摘されるようになった。<sup>(2)</sup>橋本芳一郎<sup>(3)</sup>は「旧習を重んじようとする、一流好みのブルジョア趣味の贅沢のうちに行われる」行事は「日本の政治無視」と論じた。また、たつみ都志<sup>(4)</sup>は「蒔岡四姉妹は、日本中を席卷している軍国主義の調律に背を向けるかのように、旧時代、旧家のしきたりや風情を飽くことなく満喫しようとしている」と指摘した。橋本とたつみは蒔岡分家の贅沢な生活ぶりにより、『細雪』を「反時代」的な物語だと説明している。

『細雪』において、蒔岡本家と分家は対比的に語られているようである。本家の鶴子は早婚多産だが、分家の幸子は娘を一人授かっただけだし、雪子・妙子は晩婚になる。結婚や出産だけでなく、本家と分家の生活の様子も巧みな対照をなしている。分家の贅沢な生活のみに触れるより、本家と分家の生活を比べあわせば、『細雪』の作品世界の「反時代」的な特徴は、浮き彫りに現れて来るのではないかと考える。

### 第二節 分家の贅沢な生活ぶり

蒔岡家の次女幸子は養子を迎え、分家して蘆屋に住んでいる。娘一人がいる。三女雪子、四女妙子は未婚で、本家と分家の間を行ったり来たりするが、本家の兄辰雄のことが気に入らず、分家の方に来ていることが多い。雪子は洋

服の似合わぬ、和服ばかり着ている和風美人。妙子はモダンガールの洋服がよく似合う。幸子は和服も洋服も着る有閑夫人。主として雪子の見合いや妙子の引き起こした事件で結ばれる作品の中で六年の時間が流れた。彼女たちは花見などの年中行事が繰り返される時間の中に生きていて、魚は鯛、花は桜という美学の枠に、日本趣味の生活リズムが反復されていく。

一九四〇年七月商工省および農林省は奢侈品等製造販売規則を公布した。七月十三日には奢侈品使用禁止の実施を決めた。八月一日東京では二十の婦人団体が「華美な服装は慎みましょう。指輪はこの際全廃しましょう」と記した自粛カードを街行く人に渡して、贅沢品の全廃を訴え、同じ日に一〇〇〇本以上の「贅沢は敵だ！」の立て看板が設置された。(5)

四季の風物、縁談、行事行楽、美食などの鮮やかな反復を構成している『細雪』の上流階層の優雅な生活ぶりや贅沢は、まさにその時代の「敵」と言えよう。恒例の花見の際、三姉妹は「華美な服装」を「慎ま」ず、且つ晴れ着の姿で写真を撮ることを怠らない。妙子は時々「びつくりするやうなハンドバッグを提げてゐたり、舶来品らしい素敵な靴を穿」いたりした。舞踊会の際、妙子は鶴子から父の全盛時代に拵えた一そろいの晴れ衣装を着けて、舞踊を披露した。妙子は神戸の婦人洋服店で拵えた駱駝のオーバークートやヴィエラのアフタヌンドレスなど贅沢な衣装を手に入れる。「駱駝の方は、表と裏と色の違ふ織り方になつてゐる、厚くて而も大変軽い地質のもので、表は茶、裏は非常に花やかな赤」であつた。この三百五十円かかった高級品を着て得意そうに姉たちやお春に見せびらかした。

作品の冒頭部は阪急御影の桑山邸にレオ・シロタ氏の演奏会を聞くために、幸子が和服の着付けを妙子に手伝ってもらふ場面である。妙子は「鮮やかな刷毛目をつけて」「姉の襟首から両肩へかけて」「お白粉を引」いていた。幸子は引つ掛けてみた衣装が気に入らず、何遍も衣装を解いたり締めたりして、それに合わせるための帯を入念に選んだ。蒔岡分家の者は奢侈な服装を着まわして、演奏会や歌舞伎などエレガントな行事に行きながら、自粛しない贅沢な生活を送っている。分家の生き方は、その時代の「敵」として顕在化し、昭和十年代のあり方から外れることが察

せられるだろう。

一九三八年四月には『国家総動員法』が公布される。六月に、中央連盟はそれを国民運動とするために、即刻「婚礼・葬儀を質素に」「物資節約」「主食は精白米を避ける」などの具体策を発表した。(6)戦争で勝利するために、人的資源と物的資源を軍需に注ぎ込み、「総力戦体制」を取る認識は広がった。けれども、雪子の婚礼は質素なものから遠く離れる。雪子と御牧との結婚披露宴は帝国ホテルで行われる。これはなお御牧家の希望に、「華美な催しは避けるべきであるけれども、披露だけは家の格式にふさはしいものにした」という希望があったことにもよる。御牧は華族の嗣子であるから、披露宴は「家の格式にふさはしい」豪華なものになるだろう。

作品の末尾には雪子側の嫁入り道具についても準備万端の様子であることが描かれた。二階の六畳の部屋には「雪子の嫁入り道具万端がきらびやかに飾られて、床の間には大阪の親戚その他から祝つて来た進物の山が出来てゐた」。雪子の婚礼は、質素であるどころか、きらびやかな品々で飾られ、上流階級にふさわしいものになっている。分家の贅沢な生活ぶりは作品の初めから終わりまで描かれている。

### 第三節 本家の「質素節約」の生活ぶり

蒔岡家は大正時代まで全盛を誇った、大阪船場の豪商であった。四人娘の中の長女鶴子は本家を継いで、上本街町の昔の格式のある本宅に住んでいた。鶴子は六人の子供を産んだ。主人辰雄が東京の銀行に栄転してから、渋谷の粗末な借家に住み、暮らし向きも段々以前のように楽ではなくなる。鶴子は六人の子供と夫の世話や家事で手いっぱいである。限られたお金で生活の遣り繰りをし、享楽どころか、苦勞をしている。辰雄は締めり屋で、父と母の法事は、なるべく略式で済ませようとする。

辰雄は父の三回忌までの金銭的な負担に懲りて、七回忌ではごく親しい人々にだけ案内したが、父の年忌を忘れな

い人や、聞き伝えたりする人など、多くの人々が尋ねてきたために、予定した地味な法事はできなかつた。辰雄は両親の年忌を質素にしようと考えていた。お金を無駄に使いたくないが、親戚の非難を避けるため、辰雄は父の十七回忌を立派にしてこれまで粗略にしてきた年忌を埋め合わせすると言った。

彼は「国民精神総動員などが叫ばれてゐる今日、法事などに無駄なお金を費やす時代ではない」と考え、母の二十三回忌と父の十七回忌を合わせて営むことを提案していたが、本当はそれを実行する気もなく、案内状には母の二十三回忌だけを書きかけた。しかし、欧州戦争が勃発してから、辰雄の考えは変わる。「日華事変が三年越し片付かないところへ持つて来て、悪くすると世界的動乱の渦の中へ捲き込まれるであろう、われ／＼も一層此れから緊縮しなければならぬ時だ」と言い出した。辰雄は戦争の変化に合わせ、自分の行動を変更するのである。辰雄は日中戦争の激化に伴い、軍需物資の増加が必然だから、軍需を優先させ、自分らの物資の使用を最低限まで切り詰め、一層緊縮すべきだと考えた。それゆえ、辰雄は父の十七回忌と母の二十三回忌を合併することにした。こんな時勢だから、親類の中に叱りつける人はいないだろうと鶴子は思い、進んで辰雄のやり方に賛成した。辰雄と鶴子は時局の求めていることを積極的に取り入れ、自分の行動を社会の要求に合わせている。

しかし、幸子は義兄のやり方を意外に感じて、不満を抱いている。父の「三回忌の時迄は俳優や芸妓などの参加者も相当にあり、心齋橋の播半での精進落ちの宴会は、春団治の落語などの余興もあつて、なかなか盛大」に行われた。今は父の十七回忌と母の二十三回忌を合併して行うし、法事は善慶寺でお弁当を四十人前、お酒も一人あたり一二合ぐらい出ることになっている。参加者が減っているし、料理屋での宴会を止めてお寺で弁当を出す。その上、余興などは省かれている。幸子は父と母の年忌の法事に充たされないものを感じた。本家のやり方に楯を突くように感じつつも、一つは父と母の法事の物足りない気分を満足させるために、一つは久々に迎える姉を慰労するためにもと、善慶寺の集まりの後で、自分たち姉妹だけでささやかな催しをすることを思いついた。この催しは亡き父母のゆかりのある心齋橋の播半を選んだ。余興に「菊岡検校と娘の徳子に来て貰ひ、徳子の地唄、妙子の舞で「袖香炉」、検校の

三味線、幸子のお琴で「残月」を出す」ことにした。

幸子からみれば、辰雄は自分の利益だけを図るため、何かと口実をつけて、地味な法事を営み、費用を節約しようとしたのだ。辰雄自身の性格も影響しているように、彼は社会の要求されるように、法事を「質素」にしようとする。辰雄は時局の変化に合わせて、体制の協力者になっている。しかし、『国家総動員法』が叫ばれた社会に、幸子は義兄辰雄が社会の唱えた「葬儀を質素に」する要求に沿ったやり方に納得がいかなかった。社会が法事などを質素にするよう求めて、義兄がそれを実行しているが、父母の法事は華やかに催されるものだと考え、料理屋で宴会を催し、菊岡検校を誘い、余興まで計画した。幸子は時局の要求を無視し、自分の意志で蒔岡の伝統を保とうとしているのはなからうか。

川本三郎(？)は辰雄のやり方について「東京にいる」辰雄は「阪神間にいる幸子や貞之助より時局に敏感」に反応していると評した。川本は辰雄の父母の法事のやり方と分家の贅沢な生活について触れたが、それは幸子の義兄のやり方への対策や本家と分家の生活の対蹠の結末を迎える構図について敷衍し得る。

蒔岡分家の贅沢な生活と比べると、本家の生活は「質素」で「節約」に努めている。女中一人を入れ、本家九人は渋谷の借家で暮らしている。借家は大阪の家より「遙かに粗末で、殊に建具が悪く、襖などがとても安手でひどい」。それでも、辰雄は五十円という家賃に引かれた。

さらに、六人の子供の賄いについても「驚くほど儉約」にしている。「お惣菜の献立なども大阪時代とは変つて来て、シチュウとか、ライスカレとか、薩摩汁とか、なるべく一種類で、少しの材料で、大勢の者が食べられる」ような工夫をする。「牛肉と云つたつて鋤焼などはめつたに食べられず、僅かに肉の切れつ端が一片か二片浮いてゐるやうなものがばかりを食べさせる」。五人の男の子がいるが、肉などの料理はろくに食べられない。これは東京へ移住することを契機に、辰雄は「勤儉貯蓄主義」を実行し、生活を節約しているからだ。「兄さんは今度支店長になつて月給も上り、それだけ懐にも余裕を生ずるはずであるが」、住居や飲食の方においては、すっかり「縮まり屋」にな

った。辰雄のような「締まり屋」は「物資節約」が喧しく叫ばれた時代には求められる存在なのであろう。

一九四一年に緊迫した戦局下、幸子と深い交際を持つシュトルツ夫人はドイツが戦争で「輝かしい勝利」を取るために、破れた靴下などを縫い直し、僅かばかりのことから、「諸事節約」に力を捧げ尽くそうとしている。一方、日本でも「万事が大そう質素になつた時局であるが、幸子たちは時代に背を向けるような贅沢を尽くす「エゴイズム」の世界に住み続けようとする。一九四一年に戦時体制の下にあつても、蒔岡分家にはシュトルツ夫人のような、国のため「諸事節約」に協力する気配が見られず、かえって、万事節約の社会風潮への不満を洩らしているようなことが描かれている。

雪子の結婚式の色直しの衣装は新たに染めることが出来ず、菊五郎の所作事が見られず、主食も配給制度下に置かれている。年中行事の花見にも華やかな着物姿ができず、地味な作りをし、「何を見たやら分らない気持ちで帰つて来た」。享楽の「エゴイズム」が満たされなくて、不愉快の影が作中に落ちる。しかし、厳粛な風潮を潜り抜けるように、雪子の披露宴は「帝国ホテル」で「派手」に行うことが予定されている。「諸事節約」社会に背を向ける幸子は、谷崎の創作世界で、賢明な貞之助の力を借りて、戦争による不幸をも乗り越えるように見える。幸子たちは美容室に行ったり、歌舞伎を見物に行ったりし、享楽している。雪子の仲人井谷を送別するため、幸子は雪子と妙子と一緒に上京する。井谷と歌舞伎を見る前に姉鶴子の家を訪ねた。別れる時に、姉鶴子は涙を流し続けた。雪子は姉が付き合の浅い井谷のことで泣くのは不思議だと思った。幸子は歌舞伎に誘ってほしかったために姉は、泣くに違いないのだと言った。鶴子には歌舞伎を見たいという思いはあつた。幸子たちに誘われたいし、家計に苦しんでいる自分が歌舞伎などを見る余裕もない。幸子たちが味わうことのできる享楽を、鶴子は味わえないのである。

蒔岡分家では貞之助が「軍需会社に関係し出して」から、家計にゆとりが生まれ、雪子の世話などほとんど本家の仕送りを受けず、分家が分担するようになった。一方、蒔岡本家は「虎の子のやうにしてゐた動産の大部分が、株の値下がりや殆ど無価値に等しくなつた」ということにより、「家計はますます／＼苦しくなつてゐるに違ひ」ない。姉鶴



子は幸子宛てに手紙を書き、「肌褌袴や何か下着類の古いので不用な」ものだったり、「捨てるやうなものや女中さんに上げるやうなもので」だったり、そういうものを請求するほどの貧しさだったのである。

鶴子は子供が多いため、彼らが成長するにつれて、金銭的には苦しくなるばかりで、「儉約の上にも儉約をして行かねばならず」、家計のやり繰りが難しいと苦情を漏らした。本家では「産めよ増やせよ」に応じて、子供を大勢産んだが、子育てに大金がかかり、貧困に迫られてくる。分家では子供一人しかいないため、子育ての出費は本家ほどではない。貞之助も金を儲けている。分家は時局の影響で享樂が不自由になつてはいるものの、行幸行樂、美食を楽しんでゐる。『細雪』の結末に雪子の縁談が纏まり、貞之助は本家の經濟状況を懸念し、結婚に伴う費用などは分家が負担すると申し込んだ。

## 第五節 蒔岡本家と分家の結末

蒔岡分家の贅沢な生活ぶりと本家の「勤儉貯蓄主義」の生活ぶりとは、「贅沢は敵だ」というスローガンが叫ばれた昭和十年代においては奇妙な対比をなしている。「物資節約」などが呼びかけられた戦時体制の枠の中で、本家の生活は「質素」で「節約」に努めている。シュトルツ夫人は、ドイツに帰つてから、ドイツのため「諸事節約」に協力する。一方、幸子のいる分家は贅沢な生活をし、分家は体制の局外者のように設定されている。戦時下において物資が緊縮している中、本家の義兄辰雄は父母の年忌をお寺で簡略に済まそうとした。幸子は、義兄の節約に異論を唱え、年忌の儀式の後、料理屋で席を設け、歌や踊りの余興まで計画した。

時局が分家の華やかな行事や優雅の生活に黒い影を落としている。それでも、分家は緊縮した世の中、手に入れにくくなった色直しの衣装を含め、きらびやかな嫁入り道具を雪子に用意することができた。分家は国家統制に背を向けて贅沢な生活を送りながら、家運が上昇する。一方、本家の不動産が無価値に等しいものになり、家計がますます

苦しくなっている。それに、「産めよ増やせよ」の国策を忠実に守っている本家は、子供をたくさん産んだが、苦しくなった生活に、六人の子供の育てに懲りているのだ。蒔岡本家は国家に従い、没落していく。谷崎の設定した本家と分家の結末を風刺として読み取れよう。

## 注

(1) 畑中繁雄「『生きてゐる兵隊』と『細雪』をめぐって」(『文学』第二九卷第十二号 一九六一年十二月)、九七頁に拠る。

(2) 東郷克美「『細雪』試論——妙子の物語あるいは病氣の意味」(『日本文学』第三四卷第二号 一九八五年二月)、七二頁に拠る。

(3) 橋本芳一郎「町人文学としての谷崎文学(五)……谷崎論への一つのアプローチ」『駒澤国文』第一九卷 一九八二年二月)、六三頁に拠る。

(4) たつみ都志「『細雪』の生きられた時間と空間」(『国文学解釈と鑑賞』第六六卷第六号 二〇〇一年六月)、一三九頁に拠る。

(5) 歴史教育者協議会(編)『学びあう 女と男の日本史』(青木書店 二〇〇四年十月)、一七三頁に拠る。

(6) 前掲注(5)に同じ。

(7) 川本三郎「『細雪』とその時代 迫り来る戦争の影」(『中央公論』第一二二卷第六号 二〇〇七年六月)、二三二頁に拠る。

### 第三章 健康と病気をめぐる問題

#### 第一節 「健康報国」の時代と『細雪』

##### 一、見合い相手の健康の比較

雪子は五回の見合いを経て、最後に華族の御牧と巡り合った。雪子が縁遠くなってしまった原因はいくつかある。物語の始まる五、六年前、妙子が船場の旧家の息子奥畑と家出事件を起こした際、妙子と雪子の名が間違えられて新聞に掲載された。これも雪子の婚期が遅れる原因の一つになる。

また、未年生まれが原因かもしれないと長女の鶴子は言っている。関西では「未年の女は門に立つな」云々で、「未年の女は運が悪い、縁遠いなどと云ひ、殊に町人の女房には忌んだ方がよいとされてゐるらしく」と説明されている。それゆえ、世間からの縁談も少なくなるのである。

しかし、雪子の縁遠い一番大きな原因は、「本家の姉の鶴子にしても、幸子にしても、又本人の雪子にしても、晩年の父の豪華な生活、蒔岡と云ふ家名、——要するに御大家であつた昔の格式に囚はれてゐて、その家名にふさはしい婚家先を望む結果、初めのうちは降るほどあつた縁談を、どれも物足りないやうな気がして断り／＼したものだから、次第に世間が愛憎をつかして話を持つて行く者もなくなつた」という作中の説明に言い尽くされている。その間に家運が一層衰えて来ているのである。要するに、家柄や形式に拘りすぎる蒔岡家の保守的な考えにより、雪子は縁遠くなつたとされる。

この縁遠いとされる雪子は、三十歳から三十五歳の間、前後五回の見合いをした。その見合いの相手は瀬越に始まる、野村、沢崎、橋寺、御牧の五人である。幸子や貞之助は相手の健康だの、財産だの、外貌だの、性格だの、すべてを考え合わせ、雪子にふさわしい人物を探そうとする。本論文では、この五人の健康状況にスポットを当ててみる。

(一) 不健康な見合い相手

ア、瀬越との見合い

作中一回目の見合い相手——瀬越は四十一歳で初婚であるし、「相当の素封家」というので、貞之助や雪子は乗り気になる。貞之助は「今迄大概埒外に立つてゐて、お役目に引つ張り出される程度であつたのに、今度はひどく力瘤を入れて幹旋」した。雪子は「レントゲンの撮影や皮膚科の診察の件なども、嫌な顔をせず聞き入れた」という。これは「従来の雪子には見られない態度と云つてよいのである」。今迄の見合いでは大概局外者として振舞つていた貞之助も、瀬越との見合いには気が進み、いろいろの理由から、今度ばかりは是非成立させたいということであつた。しかし、結局瀬越の母親が精神病患者だという理由で、この縁談は成立しなかつた。蒔岡家が雪子を精神病のある血統の人間と結婚させるわけはない。瀬越の血統に弱点があるため、これから産まれてくる子供もそうした影響が有り得るかもしれないと考えて、蒔岡家はこの縁談を断念した。雪子の夫となる人は健康であるべきだとされる。

イ、野村との見合い

二回目の見合い相手——野村は老けていることがひたすら強調される。彼の体格は思ひのほか「頑丈で、しつかり」しており、実際の年は四十六歳であるが、容貌は老人臭くて、顔に小皺が非常に多く、髪の毛は薄くて半分以上は白髪である。どうしても五十四五歳ぐらいに見える。それに、野村は取り止めのない独り言を洩らす奇癖がある。独り言には正常なものともうでないものがあるだろう。状況に合つた独り言は問題視しなくても良いと思われるが、例えば、蒔岡分家に女中として仕えるお春は、よく独り言を言う癖がある。映画などを見に行つたら、「あゝえゝなあ」と

か「あの人どないするのんやろう」などと言ったりする。映画を見て一人で感心したりする時に放った独り言は状況に合ったものであろうが、野村の独り言の場合は、状況に合わない意味不明な独り言と捉えられよう。一例を挙げると、

或る時同僚の一人が役所の廁の中でしやがんでゐると、隣の仕切りに人が這入つて来ただけはひがして、やがて、「もし〜、あなたは野村さんですか」と、二度繰り返して問ふ声が聞こえた。その同僚はもう少して「いえ、僕は何某です」と答へやうとしたが、「あなたは野村さんですか」と云ふその声が野村氏自身の声に紛れないので、例のひとりごとだなと心づいた、（上巻二十五）

野村は廁に入る時、隣の仕切りに人がいないと思つて、「もし〜、あなたは野村さんですか」と繰り返して問う。自身は野村であっても、廁で何度も自分に対して「もし〜、あなたは野村さんですか」と問うのはおかしいだろう。野村が独り言をついとうっかりと洩らしてしまうのは、家族や同僚の間で知らぬ人は一人もいない。「人があると云はないやうにしてゐる」が、「誰かに聞かれさうな心配のない時は驚くほど大声を発することがあり、たま〜そんな時に物陰に居合はせた者は、発狂したのではないかと思つてびつくりさせられる」というのである。「発狂ではないか」と思われるほど、理屈で説明できない行動を取った。このような状況に合わない意味不明な独り言は、精神的な面において、不健康を疑わせるような言動として捉えてもよからう。

### ウ、沢崎との見合い

三回目の見合い相手——沢崎は不健康を思わせる描写が多い。沢崎は「瘦せた、小柄な、腺病質らしい血色をした

紳士」である。「眉間の少し下、鼻梁の両側に静脈が青く透いてゐたりして、いかにも痲癩の強さうな相」をしている。怒りっぽい性質のようで、自分の知らないことを質問された時に、表情を曇らせて、不機嫌な顔になった。「眼の使ひ方が女性的で、陰性で、オドオドしたやうなところさへ」ある。沢崎の外貌や性格から推量された「腺病質らしい」氣質だったり、「痲癩の強さうな相」だったり、陰性的、女性的に見える欠陥からすれば、沢崎は男らしい、肉体的に強い男のイメージから遠い、不健全な者として描かれる。そのため、この見合いが成功する可能性は低いと思われる。結局、沢崎が寄越した「たゞ御縁無之」とばかりで、その理由を何も示さない手紙で、この見合いは断られた。蒔岡家は雪子の夫に健康な男を求めているが、瀬越をはじめ、野村、沢崎は不健康・不健全な人として描かれている。

## (二) 健康な見合い相手

### ア、橋寺との見合い

四回目の見合い相手——橋寺は今迄の見合いで出会った候補者の中で、「風采が一等」とされる。橋寺は医学博士、東亜製薬の重役でかなり収入があり、社交的であるため、幸子や貞之助は気が進み、縁談を纏める心積もりだった。瀬越や野村や沢崎などのように、健康的な側面でのネガティブな要素を、橋寺は持たされていない。「顔から手頸、指の先に至るまでむつちりと脂肪分の行き亘った色白な皮膚で、目鼻立ちの整った豊頬の好男子」と描かれている。橋寺は脂肪分の行き亘った皮膚のため、貫禄のついた紳士とされる。健康な容貌、立派な風采や多数な財産を持っている橋寺は、望ましい夫の候補者である。しかし、橋寺は雪子の引っ込み思案な性格が気に入らず、この縁談を断った。

### イ、御牧との見合い

のち雪子の夫となる五回目の見合い相手——御牧は公卿華族の子爵である。フランス、アメリカ、メキシコや南米などへも行ったことがあって、子爵の父からもらったお金で半生の放浪生活を続けてきた。帰朝してから、事務所を設け、建築家になりかけているが、事変の影響で仕事が全く閑散となつてしまつた。浪費家で放蕩な生活を送つていたため、お金の大部分を使い果たしたようであるが、設計の天分は優れたものだから、将来立派な建築家になる見込みがあるとされる。時局のため、生活に窮しているが、父は新夫婦の住む家を買ひ与えるし、二三年間の生計を補助してもらふというように、幸子らにとつて、不満の点があるが、華族の名門の出であること、交際上手な、話の面白い、趣味の広い人で、非常な酒豪でもあることから、今度こそこの縁談を固めようとする。四回の見合い相手らと違い、御牧の頑丈な体格が強調される。

体格頑丈で、孰方かと云へば肥満してゐる方であり、未だ嘗て病氣らしい病氣をしたことがなく、どんな無理でも続くと云ふのを誇りにしてゐる、遅しい健康の持主である。(下巻二十七)

どんな無理をしても、病氣らしい病氣をしたことがないという誇りを持つてゐる御牧は、精神病のある血統を持つ瀬越や、老人臭くてつい意味不明な独り言を洩らす野村や、腺病質らしい血色と女性的な目をした沢崎などと比べ合わせると、「遅しい健康の持主」として一層はつきりと浮かんでくる。

### (三) 雪子と御牧の健康の不均衡

『細雪』において、雪子の健康な体質が繰り返し強調されてきたのはいうまでもない。雪子は見た目は弱々しいが、病氣らしい病氣をしないばかりか、家族が猩紅熱、赤痢という病氣に冒されたときには、優れた「看護」人の役割を

發揮した。しかし、作品の末尾において汽車に乗り、結婚という新たな旅立ちに向かうに際して、薬も利かないしつこい下痢に見舞われる。下痢は結婚するその先にある雪子の健康だったはずの身体的なものに大きな不安の影を落としている。ずっと健康な雪子が下痢するのは異例な出来事である。一方、結婚相手の御牧は健康な持ち主である。四回の見合い相手に勝る頑丈な体の持ち主として登場する。雪子と御牧の健康の面に組み入れられた対照には、偶然と思われぬ意図が潜んでいるのではないか。「心身共に健康な人を選べ」などという『結婚十訓』があるように、健康な国民を産むために、女性と男性の健康も重視される。『細雪』は、雪子の夫探しの物語だと言える。その物語は、御牧との見合いが成功することで終わる。しかし、完結したはずの物語の最後に雪子の下痢することが付け加えられているのである。そして、ようやく小説が閉じられる。薬を飲んでも治らない、このしつこい下痢は雪子の変化の予兆として立ち現われていると言える。五回の見合いを経て、雪子は健康な夫を持つことができるが、これまで繰り返し強調された自身の健康に異常が生じる。雪子の結婚に「産めよ増やせよ」というスローガンとは外れていくような影が兆しているようである。

## 第二節 病気をめぐる問題

『細雪』において、作品が進んでいくとともに、実に頻繁に病気に関わる出来事が書き込まれている。これらの病は、きわめてリアルな身体感覚、詳細な容態・症状を表現上の特徴として描かれている。病気に関わるエピソードは、蒔岡家の世界を広げていきながら、そこに新しく登場してきた人物によって、作品の世界が豊かになる。

### 一、物語的要素としての病気



千葉俊二(1)は『細雪』の病気を衰弱と崩壊作用の印として読み取り、病気が作品の不安を表象しながら、「不可視の時間性の表徴」でもあると論じた。

東郷克美(2)は、板倉や妙子の病気が蒔岡家の人々の罹った病気とは異なる性格を持っていると指摘した。妙子を除き、蒔岡家の人々はさまざまな病気をしますが、いずれも入院を要するような致死病的病気ではない。板倉は脱疽の激痛の中で、悶死する。東郷は板倉の「蒔岡という制度への侵犯が、このように激痛を伴う病気による死という、身体的な異常によって報いられる」ことを述べた。

妙子が、幸子の主宰する蒔岡家の美的秩序に、常に混乱をもたらす存在であることは言うまでもない。妙子は板倉の死後、奥畑と復縁した。奥畑と外食し、彼の家に帰ってから、妙子は赤痢になって苦しんでいた。東郷は、赤痢になった妙子の描写は、板倉の黴菌感染の描写と同質のものだと評した。妙子の赤痢は板倉の病気と同様で、「蒔岡家の制度的空間から逸脱したものが、ほとんど反社会的異質物を見るような視線で」描写されている。

東郷は、雪子が病気をしないのは、彼女が制度側の人間であるところに理由があると述べた。「病気は、制度化され、コード化された身体を解体・停止させる異化作用として把握できる」。つまり、妙子と板倉との交際は禁断のものとされ、蒔岡家の秩序から離れた異物になっている。蒔岡の制度は、妙子と板倉に病気をさせるといふ形で罰を与えた。雪子が病気らしい病気をしなかったのは、彼女が蒔岡家の秩序に従い、保護された結果だという。

村瀬士朗(3)は、『細雪』に現れた病気を生命現象として捉え、『細雪』を摂取、消化吸収、排泄という一連の、生命維持の物語として読み取るうとした。村瀬は「病気になるということは、生命体が自己を維持するための行為であり、生命現象、つまり異物を摂取し、消化吸収し、老廃物を排泄という代謝の一種と考えられる。生物が異物と接し、それを摂取しなければ生きていけないことからすれば、病気になることは生命体維持のメカニズムの一種として、マインナスの方向性を持つものではなく、むしろ積極的に意味付けていくことができる」と述べた。板倉に病死されるだけでなく、赤痢、死産という生死の境をさまざま妙子の姿が描かれている。一方、作品結末部の下痢以外、病気らし

い病気をしない雪子は妙子と対照をなしている。村瀬は二人の対比について、妙子の積極性と雪子の消極性が関係している」と評した。

村瀬と東郷には共通点が見られる。妙子は積極的に外側の異物と接し続ける人物で、「外」の食べ物を摂取し、「身分違ひ」の男と交際する。すなわち、妙子は異物と接し、その結果として病気になる。雪子の消極性とは、異物と接することがないことにある。それゆえ、雪子は御牧と結婚するというような、異物と接する行為をした結果、作品の末尾に下痢にかかる。この下痢は「ワカ末」「アルシリン」を飲んでも、治らない。村瀬は雪子が「消毒、薬の利かなくなつた」下痢になつたからこそ、雪子の菌に対する抵抗力の強さが「種を維持していく可能性を担うものとして作動」していると指摘した。村瀬はつねに生物の地平に立ち、作品の閉じられた空間に、「蘆屋蒔岡家の人々は各々に散開して」いき、「あたかも細胞分裂することによって生命体が自己を、種を維持してゆこうとする」と読み取るうとし、「細雪』に描かれた「病氣」を分析した。

『細雪』には多くの病氣が描かれている。長女鶴子は、雪子並みの健康な体質を持っている。本家の子供は、ほとんど健康な存在として登場するのである。本家の息子秀雄は大腸加答児に罹つたり、末娘梅子が肺炎になつたりする。大腸加答児や肺炎などと比べれば、分家の子供悦子は神経衰弱、猩紅熱や脚氣という重い病氣に罹るのである。神経衰弱は精神疾患の一種で、睡眠障害やいらいら感、食欲不振などの症状が出る。猩紅熱は隔離が必要な伝染病である。脚氣はビタミンBを注射して治るが、毎年夏から秋にかけて、再発する。分家の夫婦貞之助と幸子をはじめ、雪子や妙子も脚氣に罹っている。幸子は弱い体質で、黄疽、流感、気管支加答児などを患う。出産となると、幸子は流産するし、妙子も死産する。さらに、妙子は赤痢に罹る。妙子の恋人——板倉は黴菌感染で死んだ。もう一人の恋人奥畑は慢性の淋疾に罹っているという噂がある。上述した『細雪』に現れた病氣は、以下の表のようにまとめられる。これらの病氣は、当時の社会で実際に流行っていたか否かを検討したいと考える。

中卷 (三十一)	流感	幸子
中卷 (十三)	神経衰弱	悦子
中卷 (十一)	脚気	幸子、雪子、妙子
上卷 (二十九)	流産	幸子
上卷 (二十八)		
上卷 (二十七)		
上卷 (二十五)	肺炎	本家の末娘梅子
上卷 (二十五)	神経衰弱	悦子
上卷 (二十四)	脚気	悦子
上卷 (二十三)	大腸加答児	本家の秀雄
上卷 (二十一)	黄疸	幸子
上卷 (二十)	気管支加答児	幸子
上卷 (五)	脚気	幸子、雪子、妙子、悦子
上卷 (一)	脚気	病人

二、『細雪』の病と同時代

下卷 (三十七)	下痢	雪子
下卷 (三十七)	死産	妙子
下卷 (二十四)	赤痢	妙子
下卷 (二十三)		
下卷 (二十二)		
下卷 (二十一)	風邪	幸子
下卷 (二十)	慢性の淋疾	奥畑
下卷 (二十)	赤痢	妙子
下卷 (十八)	黴菌感染	板倉
中卷 (三十五)		
中卷 (三十四)	猩紅熱	悦子
中卷 (三十三)		
中卷 (三十二)	病人	
中卷 (三十一)		

一九三六年〜一九四六年の期間は、赤痢の患者数は五万人から八万人の間を上下している。猩紅熱の患者数は一九三六年から一九四〇年まで右肩上がり、二万人近くに達したが、一九四一年から減少し、一九四六年には二千人は

どになった。(4)

脚気死者数は、大正末期に年間二万五千人を超え、昭和期に入っても日中戦争拡大などで、食糧事情が悪化する一九三八年まで毎年一万人〜二万人の間で推移した。脚気は結核とともに、二大国民病の一つと言われた。(5)

右に見たように、『細雪』に書かれた病気——脚気や赤痢、猩紅熱は事実、当時の日本で少なからぬ死者を出した病ではある。小説という言語空間において作者の意図に沿い、何でも書き得る。登場人物を健康な者として設定することができ、谷崎は『細雪』の中で、三姉妹に続々と病気を罹らせるのである。しかも、その描写は細部にわたる。

もう一方、水害や大暴風というような自然災害が描かれたけれども、その傷害を受ける者は少ない。例えば、妙子は大水害に遭遇したが、板倉によって救われる。しかし、その板倉は黴菌に感染し、苦痛の中に死ぬ。元気に見える板倉ですら病死するのだ。

作品の中に病が頻出するのである。蒔岡本家は病気から遠い存在として描かれている。その一方、病気は常に分家の穏やかな生活に侵入するのである。病気にはある意味が持たされているように捉えられよう。作品を展開していく上で、谷崎が好んで病気を使う意図を検討する。

### 三、病気の役割

#### (一) 幸子の病気

『細雪』の全三巻において、蒔岡家の優美な生活ぶりとともに、病気の記述もほとんど途切れることがない。病気に罹った主要登場人物の詳しい容態、医師に診療してもらった場面、回復に向かう場面などが細かく描かれている。主要登場人物の脆弱な肉体がめんどめんどと語られている。さらに、病気に罹った時に起こった出来事に伴い、初めて作品中に登場する人物も少なくない。

まず、幸子の病気から見てみよう。幸子は豪華な船場育ちで、贅沢な生活に保護されすぎて抵抗力が弱い。そのため、幸子は弱い体質になり、黄痘や流感に罹って、いつも冬の間には気管支加答児を患う癖がある。

一九三七年五月に、貞之助は京都へ新緑を見に行こうと幸子を誘ったが、幸子は気分が悪くて何となく体が大儀だと言うので、出かけることを見合わせた。幸子は頭が重く、吐き気がし、手足がだるくて、重い病気になる前兆のような感覚に襲われた。その明るる日から病室で寝たり起きたりして暮らした。病室のしつらいを変えてもらい、気分が余程楽になったが、思わぬ来客が訪れてきた。丹生夫人が下妻夫人と相良夫人を連れて、「阪神間の代表的な奥さん」と会わせるために、幸子の家を訪問したのである。

これは幸子が病気の時でなければならぬわけでもないのに、よりによって、幸子の病気に罹った時としている。四人の対話によって、黄痘をめぐる話題が深まる。幸子の黄痘の容態や病気が恢復に向かう場面ならば、小説の展開の面白さは失われるかもしれない。丹生夫人たちの訪問は、黄痘という病気を長く書くための手法と言っても差し支えないだろう。谷崎は病気を描く時に、ただの黄痘の描写ではなく、下妻夫人と相良夫人という人物を初めて登場させる。相良夫人は東京流の奥さんで、阪神間の奥さん丹生夫人と下妻夫人もそれに付き合っ、東京弁を使っていた。幸子はどうも東京弁が気に入らず、浅ましいものと感じてきた。相良夫人と丹生夫人は幸子の黄痘の治療方法について話し合った場面がある。

「さう云へば、黄痘で云ふ病氣、脇の下にお握りを挟んで置くといふんですつてね」

「まあ」

と、相良夫人はライターを点じながら怪訝さうに丹生夫人の顔を見て、

「あなた随分変なこと知つてるのねえ」

「両方の腋の下へお握りを入れて置くと、そのお握りが黄色くなるつて云ふわ」

「そのお握り、考へても汚いわね」

「蒔岡さん、お握り入れていらつしやる？」

「いゝえ、あたし、そんな話初耳やわ。蜷汁飲んだらえゝことは知つてますけど」

「どつちにしてもお金かからない病気ね」

と相良夫人が云つた。(上巻二十一)

丹生夫人は黄痘を治す方法として、両方の腋の下へお握りを入れて置くことを知っていた。でたらのような手当てのようだが、吐き気などをする黄痘の容態で終わらせるのではなく、ある種、滑稽な治療方法が提議された。幸子の黄痘は大して重いというのでもなしに、長いこと恢復しないでいて、どうやら治りかけたのは入梅に入つて六月になつたのである。幸子の黄痘は大して重い病気ではないものの、一ヶ月も引き摺つていた。

幸子は病気に罹りやすい体質と設定されている。病気に罹る場面は作品中に次々と続く。例えば、

幸子はいつも冬の間に気管支加答児を患ふ癖があり、悪くすれば肺炎になりますと医者に嚇かされて一箇月近く臥るのが例になつてゐるので、些細な風邪にもひどく用心するのであるが、好い塩梅に今度は咽喉で食ひ止めたらしめて、暫く平熱に復しつゝあつた。(上巻十五)

蒔岡家の全盛時代に育てられた幸子は、亡くなった父の寵愛を一身に集めて成人したので、外の姉妹より体が弱い。病気の看護に甚だ不向きである。少し無理な看病をすれば、結局自分が倒れてしまう。幸子は精神的にも堪え性がなく、子供をしつけることは向いていない。「よく悦子を相手に本気で喧嘩すること」があつた。

精神的・肉体的に弱いため、幸子は母親役を雪子に代行してもらつてゐる。悦子の病気の時の介護、学課の復習、

ピアノの練習、弁当のおかずやお三時の心遣いなどの役目は、次第に幸子から雪子へ移っていった。極端に言えば、幸子の病的な体質は、雪子の母性を發揮させるための働きをしていると見てもよいのではなからうか。

## (二) 悦子の病氣

幸子は華奢で病氣に罹りやすい体質である。幸子の子供に当たる悦子も、母親に似た体質であり、よく病氣をする。悦子は七歳という年で、早くも神経衰弱という精神疾患になるし、伝染病の猩紅熱も患った。

悦子は見たところ血色も肉づきも健康そうでありながら、母親に似た体質で何処か抵抗力の弱いところがあるらしく、淋巴腺を張らすとか扁桃腺を患ふとかして、よく高熱を出すことがあつた。(上巻六)

悦子は、見た目は健康そうであるが、実はよく病氣をし、神経衰弱に罹っているのも発覚した。ある時、幸子は、悦子連れて散歩に出て、道端に蛆の沸いた鼠の屍骸が転がっているのを見ることがあつたが、その屍骸を避けるように二三間離れた所を通つたものの、悦子はどうも自分がその屍骸を踏み誤ると思ひ込んで、恐ろしがつた。幸子はこの鼠の一件から事態の重大さに気づいて、櫛田医師に見てもらつた。櫛田医師は「診察後暫く悦子と問答などして、神経衰弱と云ふ診断」を下した。先生の判断では小児が神経衰弱に罹るのは決して珍しくはないが、幸子は最初に「まだ小学校の二年生である少女でも、神経衰弱に罹ることが有り得るのだらうか」という疑問を抱いた。

悦子が七月の末あたりから、去年ほどではないけれども、又少し神経衰弱と脚氣の気味があつて、食欲が衰へ、不眠症を訴へ始めたので、あまり病氣が昂じないうちに一度東京へ連れて行つて専門の大家に診て貰はう、(中巻

蒔岡分家の子供は悦子一人だけだが、本家には五人の男の子と一人の女の子がいる。『細雪』には、本家の子供が病気に罹るシーンはほとんどなかった。秀雄の大腸加答児と末娘の肺炎は描かれているが、秀雄の病気は一週間ほどして全快した。秀雄の不調な時、鶴子は看護婦より優れた看護してくれた雪子を賞賛した。本家の子供の病気は、悦子の神経衰弱と比べたら、早く治る病気とされる。それは悦子の「食欲が衰へ、不眠症」を訴える神経衰弱とどうも比べものにならない。悦子の神経衰弱は悪化する一方であり、幸子は彼女を東京へ連れて専門の大家に見てもらおうことにした。これまで、多くの場合は雪子の見合いで間接的に登場する本家のことだったが、悦子の上京をきっかけに、作品中に直接に描かれることになる。「大正何年以來と云ふ猛烈な」台風に揺られ、潰れそうな粗末な借家に、幸子を含む蒔岡家は驚いた一晚を体験した。一九三九年四月に悦子は再び病気になった。

悦子は花見の帰りの電車で俄かに高熱を發した。その一週間ほど前から何となく体がしんどいと言って、花見の時でもあまり元気がなかったのである。その晚帰宅してから体温を測ると四十度近くあり、櫛田医師の來診を求めたところ、猩紅熱に罹ったと診断された。その明くる日には、悦子は口の周りを除いて满面紅潮を呈して來た。口の周囲だけを残して顔が猿のようになっていたのである。櫛田医師は隔離室のある病院へ入院するように勧めた。悦子がひどく入院するのを嫌がるので、伝染病と言っても、大人はめつたに感染しない病気であるし、なるべく家族の方が出入りしないように、病室を隔離することができるなら、家庭で治療されてもいいという診断が下された。幸子は貞之助の書齋を隔離室に当てることにした。

と云ふのは、嘗て四五年前、幸子が重い流感を患った時にも一度使ったことがあるからなので、そこは全然棟の、母屋から下駄で行き通ひするやうになつてゐる（中卷三十一）



猩紅熱に罹った悦子が使う隔離室は、幸子が重い流感になった時に使っていた所である。悦子の病気を描く際に、また幸子の病気の歴史を晒け出すのである。幸子は隔離が必要するほど重い流感に罹ったことがあることが分かる。親子の弱い体質が再び強調された描写となっている。

悦子の患った猩紅熱をめぐる出来事は二つある。一つは雪子とお春が悦子の看護する光景。一つは旧シュトルツ邸へ越してきた瑞西人ボツシュ氏の登場。悦子は看護婦を連れて隔離室に引き移ったが、母屋から病人や看護婦の食事などを運ぶ連絡係は、お春が喜んで引き受けた。お春は蒔岡分家で女中として働く。お喋りで、雪子の見合いの話など、平気に小学生の悦子に喋ってしまう。口数が多いため、よく幸子たちに怒られる。つまみ食いが得意で、台所から食堂まで料理を運んで来る間に口にしてしまうことも珍しくない。肌着類の洗濯を嫌がって、垢だらけのものを何日も平気で着ている。衛生観念が弱いため、ほかの奉公人から体が臭いという苦情も出る。

失敗ばかりしているお春だが、いざという時に、我を忘れて頼もしい働きをする。勇敢に連絡役を務めた。しかし、二三日勤めさせて見ると、衛生観念が弱い性格が顕現した。病室の出入りの際、消毒することを実行せず、病人に触った手で何にでも触るといのである。雪子はお春が病菌をばら播くような行動に苦情を言った。結局、お春は辞めさせられ、雪子が任に当たるようになった。雪子は懸命に悦子の看病をした。

雪子は華奢で胸の病気でもありそうに見えながら、実は見かけによらず、悦子の看病に力を惜しまないのだ。病室用の食器類はまったく下女たちの手を借りることなく、煮焚き、持ち運びから、洗濯までを自身で担当する。雪子の細心で行き届いた看病ぶりは、幸子が及びもつかないほどであった。幸子は体質が弱いため、少し無理をして看病をしたら、自分まで倒れてしまう。雪子は一週間殆ど眠れないほど無理して、看病し続ける。雪子が看病してくれるおかげで、幸子は何の苦労もなく、「手持無沙汰な日を送った」。悦子を愛している雪子の人物像が強調される一方、雪子の体質は幸子より遙かに健康であることが間接的に含まれている。雪子の船場育ちのお嬢様と思われぬほどの丈夫

な体質が、浮き彫りに描かれていく。

雪子の行き届いた看護で、悦子の猩紅熱は順調な経過を辿り、体中の紅いぶつぶつが乾き、瘡蓋が落ちるようになる。病人に近寄らないように雪子は言っているものの、悦子が寂しがって頻りに呼ぶので、お春は一日中病室に入り浸っていた。看護婦の「水戸ちゃん」と三人で、トランプをして遊んだ。

そしてトランプの相手ならまだしも、「水戸ちゃん」と二人で悦子の手だの足だのを掴まへて、瘡蓋を剥がしては面白がつてゐた。お嬢ちゃん、まあ見て御覧、こんな工合に何ぼでも剥がれますねんと云ひながら、瘡蓋の端を摘まんで引き剥がすと、ずる／＼と皮が何処でも捲れて行く。その瘡蓋を拾ひ集めて手の中へ入れて、母屋の台所へ戻つて来て、ほら、お嬢ちゃんの体からこんな皮が剥けるねんと、それを下働きの女中達に見せびらかして気味悪がらすのであつたが、しまひには皆が馴れて恐がらないやうになつた。(中巻三十一)

猩紅熱は瘡蓋が盛んに脱落し、全身の一と皮が剥けていく。お春は猩紅熱という伝染病を恐れず、その瘡蓋を剥がすことを面白がつている。その瘡蓋を集めて、女中達を気味悪がらすのであつた。猩紅熱の快復していく症状が極めてリアルに描き出される一方、お春の輪郭も鮮明になつてくる。お春は衛生観念が弱く、移されることを恐れないのである。純朴で勇敢の心を持つて、寂しがっている悦子の遊び相手になる。東郷克美(6)はお春を「蒔岡家の負の部分、蔭の部分を引き受ける汚穢処理人」と指摘した。お春は衛生上不潔でありながら、蒔岡家の異物(汚物)を処理するのである。水害や妙子の赤痢の時などもしつかりと主家を支え、作品中大活躍した。

作品中で病気は、人物のキャラクターの特徴を浮き彫りにさせる働きがあると捉えられよう。お春は衛生観念が弱いが、伝染病を恐れず、勇敢に悦子の遊び相手になつた。雪子は見た目によらず、辛抱強く丁寧な看護ぶりを發揮した。雪子は肉体的・精神的に堪え性があるのに対し、幸子の病弱な面が繰り返し強調されている。

悦子が快方に向かうに従い、つまらないから毎日蓄音器を鳴らした結果、旧シユトルツ邸へ越してきた瑞西人から苦情が来た。悦子の猩紅熱を取り囲む出来事によつて、瑞西人の奥さんが始めて登場する。すなわち、猩紅熱はボツシユ氏の登場の引き金となる。ボツシユ氏は変り者のように書かれ、騒音に対する苦情は直接蘆屋蔦岡家に訴えるのではなく、伝言を紙に書いて、隣の佐藤家へ言いに行く。美食、歌舞伎、花見などの享楽行事だけでなく、悦子の猩紅熱により、外側の人物が分家の生活に関わってくる。この奥さんは瑞西人と自称しているが、刑事が蔦岡家へ来て、この人が行動不審であるから、注意してくれなどと言つてきた。ボツシユ氏は異国趣味の美人であるが、国籍や正式な細君であるかどうかなど、正体不明なミステリアスな人物として登場する。

『細雪』において、大洪水や台風という災難の様子も克明に描かれた。大洪水や台風は、蔦岡家の安定した生活に波乱を起こさせながら、蔦岡家の円環を広げていく。病氣は蔦岡家の内側の世界の幸子や雪子、お春などのキャラクターを鮮明に引き出す働きを持っている。さらに、病氣によつて、初めて登場する人物で、蔦岡家という閉ざされた空間に、外部の者が入り込み、蔦岡家の世界を補つていく。病氣は大洪水と台風と同様に、蔦岡家の円環の世界を豊かにする面があると言つてよいだろう。

### (三) 板倉の病氣

悦子の猩紅熱と同じ中巻に共存したもう一つの病氣は、板倉の黴菌感染である。板倉は奥畑商店の丁稚上がりで、アメリカまで行き、写真術を学んで、写真師をしている。幸子は板倉と蔦岡家とは階級が違ふと考へたものの、大洪水の時に、妙子の命を救つてくれたことで、蔦岡家に入り込むのを許した。妙子が丁稚あがりの板倉の妻にならうとするとは思つてもいかなかった。妙子は家柄より、強健な体、実力を持ち、自分を愛してくれるという配偶者を選ぶ。「実利主義」な考え方から、板倉との結婚を考へるようになる。しかし、その板倉は急死してしまつた。

板倉は中耳炎で耳だれが溜り、耳鼻咽喉科へ通っていたが、乳嘴突起炎を起こしたために、手術をした。幸い経過は良好で、「至極元気」にしていた。妙子は板倉を「平素から頑健な、殺しても死にさうもない男」だと思ひ、洋行の話をしようと上京した。その間、板倉の容態が急変した。それは手術の時に悪い黴菌が入ったらしくて、板倉は苦しがる。「ちよつと触つても跳び上がるやうに痛み、痛い」と身をもがいて呻き続けてゐる。中巻三十三から三十五まで合計三章にわたつて、黴菌に感染された板倉の症状が極めてリアルな表現で描かれている。黴菌感染をした板倉は「痛い」と呻き続けるのが特徴である。

病人の肌理の粗い額には、痛苦を堪へる脂汗が一杯に滲み出てゐた。

「痛いッ、——」

と病人は、今迄の譫言のやうな調子とは全然違ふ狂気じみた声を発した。

病人は又、姿勢をもとへ戻すのにも劣らぬ騒ぎ方をしたが、今度は「痛い」と云ふ台詞の間に

「えゝいッ、もう死にたい、死なしてくれ、……」

とか、

「早う殺せ、殺せ」

とか云ふのであつた。(中巻三十四)

板倉の心臓が、えらい凄さで波を打つて、胸がぐうツと盛り上がつたりぐうツと凹んだりしてたけど、(略)(中

容態が悪化し、妹や店員達が代る々々輸血したけれども遂に効果がなかつたこと、病毒は、足の疼痛から解放された病人の、胸部や頭を侵入して来、病人は恐ろしい苦悶の裡に絶命したこと、妙子はあんなに苦しんでみだ人の最期を見たことがなかつたこと、(中巻三十五)

板倉の黴菌感染は見た目が脹れたり膿んだりしないのである。寝返りを打つても、肌になんとも触つても、大変痛そうに見える。最初病人は、発狂したようにひたすら痛い痛いと言っていたが、今度は早く死にたい、殺してくれと言うようになった。徐々に容態が悪化し、輸血の効果もなくて、病人は恐ろしい苦悶の中で絶命した。谷崎は筆を惜しまず、板倉の症状を丁寧に書き込んでみると、ひとまず捉えることができそうである。板倉の妹、両親もこれで初めて登場した。小説の進行していく上で、板倉が病気でなければ、小説の展開は大きく変化したであろう。谷崎は当然板倉の急死の影響を考えてから、そういう目に合わせたのだろう。

真つ先に影響を受けるのは当然妙子であろう。妙子は板倉と結婚を考えるようになって、上京し、本家と交渉し、自分にあたる結婚の資金をもらって、洋行しようと思つてゐるが、幸子は、妙子が板倉に教唆されたために、このよきな行動を取つたと考える。義兄や幸子らは自分と身分違いの男との結婚を許すのはありえないので、口実を作つて、亡くなった父が残した自分の結婚資金をもらつて、「愛情と、健康と、自活する力との三つを備へてゐる」板倉と新しい生活をスタートしようと思つた。「平素から頑健な、殺しても死にさうもない」板倉のことだが、妙子は板倉の急死にショックを受けた。望んだ結婚相手がいなくなつたことで、妙子は晩婚に近づいて行く。

よく考えれば、板倉の急死によい影響を受けてゐるのは蒔岡家である。妙子が身分違いの男と結婚することは、家柄と門地を重んじる幸子たちにとっては、一番望ましくないことである。幸子が「この間から自分が何よりも苦に病んでゐる」問題は「自分の肉身の妹が、氏も素姓も分らない丁稚上りの青年の妻にならう」とすることである。板倉

の急死は「予想もしなかつた自然的方法で」「都合よく」自分の悩みを「解決」してくれた。板倉の急死を「有難い」と思つて、「人の死を希ふやうな心が、自分の胸の奥の何処かに潜んでゐる」ことに気づく。板倉の急死で蒔岡の家名が保護された。

#### (四) 妙子の病氣

妙子は蒔岡家の末っ子で、物語の始まる五、六年前、船場の旧家の息子奥畑と家出事件を起こし、新聞に出た。この時から家族に余計者扱いされる。彼女は伝統的な山村舞を習いながら、人形制作や洋裁を本業とする職業婦人を目指そうとするモダンガールである。白系ロシア人との付き合いなどを通し、自分の世界を広げていく。妙子は板倉に死なれてから、奥畑と復縁した。二人が料理屋に出向いた際、妙子は鯖寿司を食べてから急に発病した。「激しい下痢が始まり、腹が絞り出し」た。

熱が四十度近くもあり、悪寒戦慄を伴つてもゐたので、(中略)昨夜からもう二三十回も下痢したさうであるが、(中略)催す毎に少量の便通しがなく、そのためになほ苦しいのであつた。(下巻十八)

たゞ昨日よりも下痢が一層頻繁になり、一時間に十回ぐらゐ催すやうになつた。熱も引き続いて下る様子が無い、(中略)

それに、どう云ふものか今以て一日のうちに熱の差し引きが何回となくある。高い時は九度六分から四十度近くになり、激しい悪寒と戦慄が伴ふ。それは一つには、下痢を催すと下腹が痛んで苦しがるので、下痢止めを飲

ませるせるなので、下痢を止めると身ぶるひが来て熱が上る。反対に通じをつけると熱は下るが、徒に腹が痛んで、出るものは水のやうなものばかりなのである。(下巻十九)

病人の容態は、病院へ移した二三日後から眼に見えて快方に赴いて行つた。あの日の気味の悪い死相などは、不思議なことに僅か一日だけの現象に過ぎなかつたものと見えて(下略)(下巻二十二)

赤痢のせいで、妙子は高熱と下痢の日々の苦痛が激しく、大變衰弱し、瘦せ細る。医師の話では肝臓膿瘍という病気を併発しているようで、従つて、事に依ると、助からないという。最初はお春は妙子の看護に行き、幸子たちに病人の容態を知らせたが、同じく伝染病を恐がらない雪子はお春の代りに泊り込むことにして、お春は連絡係になつてもらう。悦子の猩紅熱に罹つた時と同じく、雪子は家族側のものが続々と病氣になつた時、その真つ先に立ち、優れた看護人の役割を果たした。優れた健康な雪子の体質は再び強調された。お春は東郷の言葉を借りれば、蒔岡家の異物を処理することによつて作品中で活躍した。

妙子の病氣によつて新しく登場する人物は、奥畑の乳母「お婆やさん」である。お春は妙子が奥畑の家で病臥していた間に、すっかり奥畑の乳母「お婆やさん」と懇意になる。「お婆やさん」は、お春に妙子の生活の内幕を曝け出す。

妙子は姉たちの力も借りず、他人の支持などに頼らず、女の腕一つで独立独行するモダンガールと思われるものの、その生き方は「お婆やさん」の登場で反転した。「お婆やさん」の話では、ここ数年来、妙子は奥畑を経済的に利用した。そのため、蘆屋の家から追い出されることになって、自活している妙子は、衣食住に贅沢を尽くすことができた。妙子は姉たちに始終奥畑のことを経済的無能者のように言い、世話になるばかりか、将来自分が養つてやらなければならぬと立派な口を利きながら、世間と姉たちを欺いていた。妙子が奥畑の支援を受けるあたりから、自我の意志を立て通していかうとするその姿は破滅した。

## (五) 奥畑の病氣

奥畑は妙子の家出事件の相手である。この船場の若旦那はおしゃれ好きで、定職がなく、家計を食い潰す者である。よく家の商店から指輪、宝石、腕時計など盗んできて、妙子に貢いでいた。このため、奥畑は兄に勘当され、僅かな涙金をもらってきて、アパート暮らしをするようになった。女遊びはするが、妙子には真剣に向き合い、彼女の機嫌を取るために、一生懸命だった。贅沢三昧を始め、百貨店や化粧品店、洋服店などの勘定が驚くほど高いため、財産はほとんど妙子に絞られた。妙子は奥畑と外食してから、彼の家で発病したことを幸子たちに知られた。妙子の赤痢になった時の「不健康さ」と関連し、奥畑の「慢性淋疾」病に罹る噂が流れる。

幸子は、妙子の黒ずんだ肌に不潔な感じを受けたのは、日頃の不品行な行為の結果だと思っている。たるんだ皮膚は病苦のための衰ればかりではなく、板倉や奥畑と肉体関係を持っていて、まして奥畑は「慢性の淋疾」を持っているため、幸子の眼に「花柳病か何かの病毒が潜んであるやうな色」をしていると映っている。奥畑は十七八歳から茶屋酒の味を覚えて以来、乱行に耽る品行の悪い面があるため、奥畑が慢性の淋疾に罹っているという噂が立つのである。妙子が二人の男と肉体関係を持ったことで「不健康さ」を示すのと相違し、雪子は女性ホルモンが崩れ、顔に染みが出来てくる処女の清らかさを持っている。墮落している「不健康」な妙子と清い身体を持っている「健康」な雪子と鮮やかな対比を成している。

## 第三節 医療事故をめぐる問題

妙子は水害の時に溺れ死にしそうになったところを板倉に助けられ、板倉と結婚しようとするが、彼は医療過誤で



死んでしまう。板倉が中耳炎の手術を受けるのだが、なぜか術後に激しい足の痛みを訴え、やがて足を切断され、その後亡くなる。原因は手術中の黴菌感染による脱疽とのことである。また、妙子は外食する時、鯖寿司を食べて、赤痢で一時激しい悪寒と戦慄に襲われる。医者処置が悪く気味の悪い死相に陥ったが、櫛田医師の下で治療を受けた結果、快方に向かう。彼女は三好の子を身籠もった時に、神戸の病院で密かに出産しようとするが、子供が逆子で、分娩の時に医師のミスにより、死産となる。

この一連の病気は、板倉が死んだり、妙子が一時死の入りに踏み込んだり、妙子の赤ん坊が死んだりする医者医療ミスや処置の手遅れという医療事故を登場させる。東郷克美<sup>(7)</sup>は板倉と妙子は蒔岡の制度を侵犯した報いが、身体的な異常によって現れていると指摘した。妙子は身分違いの男との結婚を考えるが、その相手の板倉は急死してしまう。丁稚上がりの妻になるのは「家柄や門地」を重んじる蒔岡の制度を犯すものである。幸子にとって、板倉の急死は蒔岡の家名や雪子への悪影響を都合よく解決してくれた「自然的方法」である。板倉が死んだ後、奥畑とのよしみがまた復活する時、赤痢になったことと素性も分からないバアテンダアの子供ができたのも蒔岡の制度から遊離したもので、病気という方法で妙子を処罰する。要するに、東郷はこれらの医療事故は幸子の主宰する蒔岡の美的秩序に混乱をもたらす者が受けている罰だと見ている。

村瀬士朗<sup>(8)</sup>は昭和十年代には「医療行政自体に軍隊中心的思想があるわけで、言ってみれば、病気になるがちな人を救うことより、そういう人間は無視して、頑丈な人をたくさん作ろう、みたいな社会的合意」があったと言う。だから、「医者の見立て違いみたいなことは作者においても読者においても全然意識上の問題になってこない」と村瀬は『細雪』の医療ミスについて評した。しかし、作中に何度出てくる以上、医療ミス、谷崎にとって「全然意識上の問題になってこない」はずはないと考える。板倉の黴菌感染による敗血症や妙子の赤痢や死産という危うい悲劇に陥るのも、度々医者ミスや手遅れのため、起こった事件を見逃すわけにはいかない。

繰り返しになるが、東郷は妙子が蒔岡の秩序を侵犯したから身体的な異常によって報じられると言い、雪子が病気

をしないのは、蒔岡家制度側の人だからだとしている。妙子は蒔岡家の制度を犯して、その枠の外に出ると、医療に支えられていない。幸子が妙子の味方をしようとする時に、名高い榊田医師を呼んで、妙子の病気を治療すると、容態が快方に向かう。

雪子は東京で式を挙げれば、御牧家の人となり、優れた榊田医師のいる蒔岡分家の世界から離れて行く。榊田医師の保護された環境から御牧のところへ嫁ぐことによつて、果たして榊田医師のような腕のある医者に恵まれるかどうか。雪子は御牧の生活圏に入る代りに、榊田医師の手元から離れた外側の不明な世界に出て行く。

#### 第四節 「健康報国」の時代と『細雪』の病

『細雪』において、病気は物語の起伏を構成するように頻出している。病気によつて新しく登場した人物は蒔岡家の世界を広げていく一方、家族のものは続々と病気になつても、雪子だけ抵抗力が強く、度々優れた看護人の役割を果たす。しかし、結婚となると、繰り返し強調された雪子の健康は損なわれ、不安の影が落ちている。

一九四一年一月、閣議は「人口政策綱領」を決定した。「人口政策綱領」は総力戦体制での人的資源の確保を目的とした人口政策である。兵力と労働力を確保することが必須の課題であるとされ、一九六〇年には総人口を一億人にする目標を掲げている。それに、政府は人的資源の量だけではなく、人的資源の質も求めている。ファシズムは国民を「人的資源」として活用するため、極端な優生学的人口政策を実行した。国民には健康と強靱な体力・精神力の持ち主であることが義務づけられ、「改善」の見込みがない病者・障害者は社会から排除された。一九四二年四月に厚生労働省人口局は「健民運動実施要綱」に基づき健民運動の推進を決定した。

「要綱」によれば、健民運動の趣旨は「大東亜共栄圏」を確立するという「聖戦目的完遂の一助」として、人

口増殖とその資質の向上を図るということにあり、具体的な運動の課題として、「皇国民族精神の称揚」、出生増加と早婚の奨励、母子保健の徹底、体力の練成、国民生活の合理化、結核予防および性病の予防撲滅を掲げている。(9)

政府は国民を「人的資源」として活用するために、心身ともに健康な国民を求めているが、女性にも厳しい健康管理体制が敷かれていた。国民の健康を喧しく強制された時代に書かれた『細雪』において、病気が頻出する。幸子には黄痘・流感・気管支加答児・流産、娘の悦子には神経衰弱・猩紅熱、妙子には赤痢・死産、妙子の恋人板倉には黴菌感染による敗血症、妙子のもう一人の恋人奥畑には「慢性の淋疾」の疑いがある。これらの病気は作中の平穩な生活に波乱をもたらす。だとすれば、『細雪』という作品の中で、谷崎は、病気にどのような意味・役割を持たせようとしたのであろう。

病気に罹った主要な登場人物は、以下の四種類に分けられる。

- 子供の不健康 悦子
- 母親の不健康 幸子 妙子
- 見た目が不健康の雪子、實際健康の体を持つ雪子は晩婚になった。
- 青年の不健康 板倉 奥畑

『細雪』における兵力となる青年の不健康、次の世代を産む母親の不健康、人的資源を担う子供の不健康の構図は、人口の増加とその資質の向上を図る社会背景に逆らうものと言えよう。病気は次々と主要人物に降りかかる。かつて健康であった雪子さえも、人妻になりかかる時に下痢が止まらないところで作品が終わるのである。雪子は独身の時、

健康な体の持ち主としてあまりにも強調されているように感じざるを得ない。その彼女は結婚するようになり、将来母親になりうるが、結婚をきっかけに健康状況が急転して変容し、薬も利かないしつこい下痢に罹る。姉妹の幸子、妙子のように、次の世代を産む母親になりかけると、病いが侵入するように察せられるだろう。長女鶴子には子供六人もいるが、下の姉妹三人からは、社会が母親に義務づけることを完成できないのではないかと思わせる予兆が窺えよう。

## 第五節 「病氣」という美

### 一、「病氣」の中の雪子

雪子は姉妹の中で、鶴子並みの健康な体質であるが、弱そうに見える。一回目の見合い相手の瀬越は、雪子を「御病身と云ふやうなことはないであらうか」と疑う。その疑いを解消するため、雪子はレントゲンの撮影や皮膚科の診察まで受けて来た。診察の結果は、異常なしとのことである。姉幸子と妹妙子は陽気な顔をしているが、雪子は内向的で陰気な気質である。幸子は雪子の健康が疑われるのを不平に感じた。自分と妙子のような陽気な顔立ちは世間にざらにある。かえって雪子のような「ほんたうの昔の箱入り娘、荒い風にも当たらないで育つたと云ふ感じ」は、「弱々しいが楚々とした美しさを持つた顔」である。大切に育てられた古典的な娘のように風に耐えられない、この弱々しい美しさは、世に少ないものである。幸子はこの楚々とした器量を分かってくれる人物にこそ、自分の妹を嫁がせたいと考える。華奢な体つきで病身のように見える雪子は、幸子にしてみれば、弱々しい美しさを持つている。見た目によらず、芯は意外と強いのである。幸子はよく病氣をするが、雪子は病氣らしい病氣をしないばかりか、無理に家族の者の看病をし続けても、倒れないのである。精神的・心理的に堪え性がある。細心な看病ぶりを見せ、献身的な一面が連想される。丈夫な体質といえども、弱さもアピールするように描かれている。雪子は女性の健康的な魅力と、

病的で神秘的な魅力の両方を持っている。

## 二、蒔岡の母親

蒔岡家の母親は、幸子が十五歳の時に肺病に罹り、他界した。幸子の記憶の中にある母親は美しいものである。それに、その清らかな美しさは、病氣の状態などに大いに関わりがあるとされる。幸子は母親が病氣になった姿を實際以上に美しく見えると回想した。

彼女の記憶の中にある母その人は、現在の姉や彼女自身よりも格段に美しい清いものであった。尤もそれには、亡くなった時の周囲の状況や病氣の状態などが大いに関係してゐるので、当時十五歳の少女であつた幸子の眼には、母の姿が實際以上にすが／＼しく映つたのもであろう。肺病患者でも病勢が昂進して来ると醜く痩せて顔色が悪くなるのが多いけれども、母はその病氣でありながら、臨終の際まで或る種のなまめかしさを失はなかつた。顔色も白く透き徹るやうになつただけで黝ずんでは来なかつたし、体も、痩せ細つてはゐたものゝ手足にしまひまで艶々しさが残つてゐた。（下巻八）

肺病になつた普通の病人は、病勢が進むと痩せて顔色も悪くなり、黒ずんでくるのである。しかし幸子の母親は、肺病で瀕死の状態でありながら、顔色も白く透き通るやうに艶かしかつた。病身の母親の姿が、實際以上に清々しく幸子の眼に映る。「健全さ」、「健康さ」、あるいは「健やかさ」という基準に沿い、美を判断するのではない。母親の場合は美しくありつつ、死に向かつていくに連れて、醜さを見せないばかりか、美しさを増していく。健やかな体ではなく、病氣になつた際に、肉体の生命力と官能性は引き出される。

### 三、死産の子供

妙子は三好の子を身籠もったが、その子供は死産になった。死んだ子供は髪の毛が濃く黒く、顔色は白く、頬が紅潮している。この死んだ赤ん坊は「市松人形」のように見える。幸子の眼には「透き徹った、なまめかしいまで美しい」顔に映る。

弱そうに見える雪子は、楚々とした美しさを持つ。肺病になって実際以上に美しくなる母親の姿。死んだ赤ん坊は人形のように見え、なまめかしいまで美しく映る。不健康のものが、作中にある種的美を成している。雪子は芯が健康であるが、弱々しい美しさを保っている。蒔岡家の母親は病気をした時に、実際以上に清く美しく見える。死んだ赤ん坊は美しく映る。弱そうに生きているもの、病気に罹ったもの、死んだものが美しさで結ばれている。「健全さ」。「健康さ」にマイナスな要素が秘される者は、谷崎の追い求めた世界で魅力的美的な者とされる。この三人の美的なものは清らかであるため、病気になっても、その清さが保たれている。

### 四、「病気」の中の妙子

妙子は生き生きとした、頬豊かな近代娘とされるが、赤痢に罹った時に、幸子は妙子の性的魅力は消えたと思っていた。「たるんだ顔の皮膚は、花柳病か何かの病気が潜んであるやうな色をしてゐ」て、幸子らはそれを墮落した女の肌と連想する。妙子のどす黒く濁った肌は、花柳病でもありそうな血色を示した。雪子らがそう思ったのは妙子の交際している奥畑が、慢性の淋疾に罹っているという噂を耳にしたことがあるためである。妙子は板倉や奥畑らと「清い交際」をしていると言っていたが、雪子らは妙子の言うことを信じなかった。妙子が結婚する前に、複数の男の人

と肉体関係を持つているのは、蒔岡家のお嬢様として失格の仕業とされた。病氣の時、廃類した皮膚をしていて、その「不健康さ」が目立った。幸子は妙子が女としての貞節を失った、軽い女だと思つてゐる。日頃の不品行な行為の結果、妙子は病氣になつた時、美しさが消えた。幸子はそれを不潔と感じた。垢じみて汚れている肉体は「暗い、淫猥」なものとして読み取つた。幸子は妙子ぐらいの年齢の女が長年の患いで寝付いたりすると、「時には清浄な、神々しい」ような姿さえになるが、妙子はそれとは反対に、実際以上に老けてしまつていたと感じた。幸子は妙子を「余り上等でない曖昧茶屋か何かの仲居」というところまで思つた。品行の悪い妹は淫猥の「仲居」であり、清浄な神々しさなど持ち合わせていないと思つた。

雪子の「染み」は妙子の不品行と対極にあるものとして描かれる。雪子は三十五歳にして、未婚のまま、男性と関係を持つていない。そのため、ホルモンのバランスが崩れ、顔に翳りが現れてくる。結婚すれば、その「染み」が自然に治るといふ診断が下された。雪子の「染み」は清浄な姿を連想させる。雪子は弱そうに見えるが、清浄で美しい者とされる。

『細雪』では、病氣を通して、社会から求められている健康な女性と異なる存在の女性を描いている。それに、弱々しい、あるいは病的な女性はきれいな存在である。しかし、きれいという感じを与える前提は、その女性が清浄な体の持ち主であること。谷崎の理想とする女性の美のあり方の一つは、病的でありながら、清浄な体を持つてゐることにあると言つてもよいだろう。

## 第六節 『細雪』における理想的な女性美

『細雪』において、健康と病氣という視点から蒔岡家の四姉妹の生き方を見てみると、本家鶴子の一家は健康な体質の持ち主として描かれる。分家の幸子と娘の悦子、妙子は不健康な体質である。妙子の恋人板倉、奥畑は病に近い

ものとして登場する。妙子は三好の子供を妊娠しているが、死産してしまった。

谷崎は健康が強制された時代に、『細雪』において好んで病氣を使った。幸子と娘悦子は病弱な母子として描かれる。妙子と恋人たちは病に近い存在である。健康な雪子は悦子・妙子の看病を尽くし、優れた体質が強調される。一方、雪子は見合い相手が不健康・不健全な者が多いため、早婚できなかつた。雪子は結婚が決まると、体質が変化してしまふ。鶴子は社会に与えられた義務を、十分に果たしている。幸子・妙子・雪子は病氣やら、晩婚やら、流産やら、死産やらという目に遭う。これらによって、三姉妹は姉と相違し、社会の求めている健康な国民と早婚多産の政策から離れる存在として描かれている。

雪子は病身のように見えるが、楚々とした器量を持っている。歳が三十過ぎても二十三四に見えるような、一種の永遠の美しさを保っている。肺病患者の蒔岡の亡母でさえも、病勢が悪化するに連れて、実際以上に美しく映る。死産した子供は「市松人形」のように美しい顔をしている。『細雪』の世界で、美は「健康さ」という基準では判断できないように察せられるだろう。一方、数年来不品行な生活を続けてきたため、妙子が赤痢に悩まれた時に、却って「淫猥」とも言えるように映る。妙子の疎ましい姿はまさに前述した三人と対照的になっている。妙子と雪子らの違いは清浄ではないところにある。『細雪』世界のイデアルな女性美は病的でありながら、清浄である者とされる。このように、谷崎は社会の求められている健康な女性と異なる、「不健康」な女性を作りながら、病的で清浄な女性を理想的な美のあり方の一つとして追求しているのかもしれない。

## 注

(1) 千葉俊二「『細雪』論」(『国文学解釈と鑑賞』第五二巻第四号 一九八七年四月)、一三九頁に拠る。

(2) 東郷克美「『細雪』試論——妙子の物語あるいは病氣の意味」(『日本文学』第三四巻第二号 一九八五年二月)、七



六頁に拠る。

(3) 村瀬士朗「代謝する身体の物語——生命現象としての「細雪」」(『国語国文研究』第八七号 一九九〇年十二月)、八頁〜九頁に拠る。

(4) 総務省統計局の統計データ(日本の長期統計系列の第二十四章「保健・医療」の「伝染病及び食中毒の患者数と死亡者数」に拠る。<http://www.stat.go.jp/data/chouki/24.htm>、二〇一四年三月七日に確認。

(5) 立川昭二『病気の社会史 文明に探る病因』(一九七一年十二月 日本放送出版協会)、一八頁を参照。

(6) 前掲注(2)に同じ。引用は七八頁に拠る。

(7) 前掲注(2)に同じ。

(8) 村瀬士朗ほか「討論(「細雪」——病いの時空へシンポジウム)」(『国語国文研究』第八七号 一九九〇年十二月)、引用は四四頁に拠る。

(9) 藤野豊『強制された健康 日本ファシズム下の生命と身体』(吉川弘文館 二〇〇〇年八月)、九七頁に拠る。

#### 第四章 国家による性支配——『細雪』、『痴人の愛』、『卍』における子供をめぐる問題

##### 第一節 『細雪』における産児問題

『細雪』上巻、中巻、下巻に似たような描写がある。悦子の飯事、鶴子の多産、幸子の流産、妙子の死産、そしてまた雪子の晩婚と体質の変化がそれである。これら出産をめぐる話題が全巻を通して配される意味は大きい。この作品が、特に、第二次世界大戦という時代を背景にして書かれた点に注目しよう。

『細雪』は一時時局に合わないものとして当局から連載を禁止された。一九四三年一月の「中央公論」に『細雪』の第一回（八章まで）が発表されたが、三月号に第二回（十三章まで）が発表されたところで、連載中止となった。当時の編集長畑中繁雄<sup>(1)</sup>の証言によれば、陸軍省報道部が主催する六日会という、都下全雑誌の編集責任者を集めた会の四月例会で、報道部杉本和朗少佐が、『細雪』について、「緊迫した戦局下、われわれのもつとも自戒すべき軟弱かつはなはだしく個人主義的な女人の生活をめんめんと書きつらねた、この小説はもはやわれわれのとうてい許しえないところであり、このような小説を掲載する雑誌の態度は不謹慎というか、徹底した戦争傍観の態度というほかない」と発言した。戦時下という非常時にあたって、『細雪』は連載中断となった。それにもかかわらず、谷崎は一九四四年四月に熱海市に疎開して密かに『細雪』の執筆を進め、同年七月には上巻二百部を限定私費出版した。十二月には中巻を脱稿したが、当局の干渉で印刷頒布を禁じられた。その後一九四五年の五月になると、家族を伴い岡山県津山市や勝山町へと移り戦火を避けたが、その年の八月十五日に終戦を迎えると、一九四六年三月には京都に転居、一九四七年二月にはその中巻を中央公論社から出版、下巻を「婦人公論」に同年三月から連載し、翌一九四八年十月号で完結、同年十二月に下巻が中央公論社から出版されたものである。<sup>(2)</sup>

このように、言論弾圧を受けてきた谷崎が『細雪』の中で仕掛けた「八月十五日」の痕跡については次のような指

摘がある。鈴木貞美<sup>(3)</sup>は雪子と妙子を「伝統の日本」と「モダニズムの日本」の体现者と見ようとし、前者の「下痢」と後者の「死産」に託された寓意として、そこに「敗北に終わった戦争の影」を読み取ろうとする。鈴木は雪子の下痢と妙子の死産を敗戦の影として見ているが、本論文では幸子の流産、悦子の飯事遊びを加え、雪子の晩婚をめぐる産児問題にもスポットを当てて見よう。

一九四一年、閣議は出生の増加のための具体策として、一夫婦の出生数を平均五人とすることを示した。東京に住む蒔岡家の長女鶴子は六人の子供を産み、自分の手一つで育て、完全な体制の協力者のように描かれている。それに対して、幸子はたった一人の女の子の面倒さえ見られないで、雪子の手を借りている。幸子は子供を産もうと願っていたが、流産という目に遭う。結局幸子は子供一人しか持っていない。雪子は子供好きで、子供の世話も適任で健康な体質を持っているが、三十五歳にして初めて結婚できる。縁談がようやくまとまるが、下痢をし続ける目に遭う。雪子は健康な御牧と結婚するが、自身の健康に異常が生じる。雪子の結婚には「産めよ増やせよ」というスローガンから外れていくような影が兆しているようである。妙子は三好の子を身籠もっていたが、死産という目に遭う。

悦子とローゼマリーの飯事——人形に接吻させるだけで、「ベビーさん来ました」という遊びが何度も繰り返された。妊娠と出産が簡単に済むという考え方は幸子の流産や妙子の死産と巧みな対照を成している。国家は富国強兵の基礎となる過剰壮丁を要請し、多くの子を産むことを要求する。子供をたくさん産めと女性に義務付け、女性の肉体的・精神的損失に目を配らなかつた。丸川哲史<sup>(4)</sup>は「幸子の流産の血や妙子の死産の子は、富国強兵的な有用性に奉仕をしたり、死の強制を美的純粋性の中に昇華させたりするようとする時流に背を向ける証拠としてあり、この時代に生み出された『嫡子』は、すべて死を宣告されていると告げている」と述べた。この丸川の指摘は雪子、妙子の晩婚にも敷衍し得る。

「早婚多産」が奨励された時代に、雪子は「早婚多産」の協力者のようには描かれていないし、それは戦時体制の枠の中で反時代的な抵抗の要素を帯びてくる。国家は女性を種族を孵化する産児機械の役目としか見做していなかつ

た。谷崎は当時の国家の性支配に対して、異なる世界を『細雪』において築いた。一九四一年に閣議決定された人口政策確立綱領に基づくスローガン「産めよ増やせよ」は、当時の人口政策として唱えられたが、谷崎が『細雪』で作ったプロットは、国家による性支配の人口政策に異論を唱えたと見てよいのではなからうか。

それに、『細雪』に現れてきた思想は、戦時体制が近づいてくる時、禁止された産児制限運動思想と共通することがある。産児制限は母親の健康を守り、また、計画的出産が家庭の幸福と安定をもたらす運動として展開された。産児制限は、家族計画、さらに人口抑制の意味に捉えられるようになった。雪子・妙子の晩婚や幸子の流産、妙子の死産は人口抑制の意味を代弁しているのであろう。

日本の産児制限運動は一九二二年改造社の招きで、サンガー夫人の来日によつて大きな進展をもたらした。アメリカの産児制限運動の指導者サンガー夫人が一九二二年の三月に来日し、内務省が産児制限運動の公開講演禁止を条件に上陸を許可した。サンガー夫人はアメリカの社会改良家で、スラム街で看護婦として働いていた。貧困の中で、無理な人工中絶やまた流産や多産で身体が傷つけられ、命を落とす女性や、残された家族の悲劇を目の当たりにした。サンガー夫人はその貧困と多産の悪循環を痛感し、産児制限運動を起こした。<sup>(5)</sup>人口制限の手段として避妊の普及を唱えるサンガー夫人は、国外で人口を抑制する運動を展開した。サンガー夫人は一九二二年の三月上旬く四月上旬に来日していた。同年八月にロンドンで開催される万国産児制限会議に出席する途上、日本に寄つたという。<sup>(6)</sup>

内務省当局は、産児制限は「産めよ、増やせよ」の国策に反するという立場から、サンガー夫人が横浜埠頭に上陸するとさつそく、持参の宣伝パンフレット『家庭制限法』数万部を押収し、内務省に呼びつけて、産児制限の宣伝演説を日本帝国領土内でやってはならぬと嚴重に申し渡した。このため改造社主催の講演会は中止となった。しかし医師、薬剤士を対象とする特別講演会は実現した。結局サンガー夫人は、医師、薬剤士のみを対象とする講演会を八回行ったのみで日本を去つていった。<sup>(7)</sup>

日本の産児制限運動も、サンガー夫人来日により、確実に抽象論から実際論へと変わった。一九二二年サンガー夫

人來日以後は、産児制限相談所が個人や色々な組織で作られて、避妊法の考えや器具の普及が公然とされるようになった。(8)

一九二二年サンガー夫人來日後の、谷崎の作品に目を向けると、『痴人の愛』(一九二四年)、『卍』(一九二八年)の細部には、産児制限運動の思想と一致するプロットが仕掛けられている。

## 第二節 『痴人の愛』における産児問題

『痴人の愛』は一九二四年三月二十日から、同年六月十四日にかけて東西の『朝日新聞』に八十七回にわたって連載された。しかし、取締り当局からの弾圧により、谷崎は『大阪朝日新聞』への連載を中断せざるを得なくなる。続編は舞台を雑誌『女性』に変え、『女性』には一九二四年十一月から翌一九二五年七月にかけて連載された。

譲治はカフェの女給から見出したナオミを引き取り、いずれは自分の妻にしようと思った。譲治はナオミと一緒に暮らすうちに、ますます彼女の肉体に惹きつけられて行って、奴隷のように尽くしていく。「ナオミの色香に身も魂も狂つて」いた譲治は彼女の肉体世界へ傾倒する。正常な夫婦生活が取れる二人の間に、子供を作る条件が満たされる。しかし、ナオミは子供を産みたくないと言明した。

「お前、子供を生んでくれないか、母親になつてくれないか？ 一人でもいゝから子供が出来れば、きつと僕等はほんたうの意味で夫婦になれるよ、幸福になれるよ。お願いだから僕の頼みを聴いてくれないか？」

「いやだわ、あたし」

とナオミは即座にきつぱりと云ひました。(十八)

私たち夫婦はいつの間にか、別々の部屋に寝るやうになつてゐるのですが、もとはと云ふと、これはナオミの発案でした。(二十八)

ナオミは譲治の「子供を生んでくれ」という要求をきっぱりと断つた。『痴人の愛』連載開始は一九二四年であり、翌年、連載が終わつた。「私が始めて現在の私の妻に会つたのは、ちやうど足かけ八年前のことになります」。「足かけ八年前」とは、一九一七年と推定される。作中時間は一九一七年から一九二四年までである。ナオミが子供を産みたくないという描写は、一九二〇年に当たる。ナオミが譲治と別の部屋に寝るようになる年は、一九二一年から一九二四年の間に当たる。一九二〇年から一九二四年までの社会は、多産が奨励される風潮であるが、日本の人口政策の展開過程において、政府当局は産児制限運動の発展に、片目を瞑るような緩めの政策統制を取つたが、この時期も明治政府以来の人口増加を擁護する性格が貫かれた。(9)ナオミが子供を産むことを拒否することは、その時代の要求と相反するように見える。それに、夫婦の間柄を別にし、ナオミがわざわざ譲治と別の部屋に寝るのは、避妊の手段として子供を産む可能性を最小限に引き下げようとしたのではないか。

### 第三節 『卍』における産児問題

『卍』は一九二八年に雑誌『改造』に発表された。女性同士の同性愛をテーマとした作品である。『卍』作中の物語は、園子の口から語られていく。夫婦生活が合わない園子と孝太郎、同性愛関係を持つ園子と光子というストーリーが展開する。園子は夫孝太郎と性生活が合わないことを自白した。「どうも性質が合いませんし、それに何処か生理的にも違つてると見えまして、結婚してからほんとに楽しい夫婦生活を味はうたことはありませんだ」。夫との精神的・生理的な相性のずれは夫婦関係を冷めたものにするだろう。夫婦関係が性の不一致によつて、欲求不満をため込

んだままでは、夫婦関係が破綻するのは当然だろう。園子と孝太郎の間には健全な夫婦関係の要素が存在しないため、子供を産む可能性は下るだろう。

園子とはまらない気分を紛らわそうとし、美術学校に通い始めた。そこで光子という女性と知り合う。数日経って、学校では二人が同性愛の関係にあるのではないかという悪意に満ちた噂が広まる。当初は噂に過ぎなかったが、会うたびに二人の親密度は増して行き、遂に同性愛関係になった。やがて園子の夫の孝太郎が妻の行動を疑い始める。その関係は孝太郎に知られ、夫婦喧嘩になった。しかし、孝太郎が園子と光子の同性愛関係に入り込んで、孝太郎と光子が肉体関係を持った。園子―孝太郎、園子―光子、孝太郎―光子という三角関係に至った。その後、光子は孝太郎と園子との夫婦関係を嫉妬し、園子と孝太郎は光子に「情欲鎮静」の薬を飲まされる。光子は彼らを「疲れさして、情欲も何も起こらんように麻痺」させようとする。園子と孝太郎は毎晩睡眠薬を飲まされるうち衰弱していく。

光子と園子が付き合っていた時に、光子の異性愛の相手綿貫という青年がからんでくる。光子―綿貫の恋人関係が園子に知られ、園子は光子との関係を一度切った。しかし、光子の妊娠事件によって、園子―光子は仲直りした。綿貫は美男だが「男おんな」で性的不能者である。綿貫は幼少の頃お多福風（幼児・学童がかかりやすい伝染病。発熱し、耳下腺が腫れて、お多福のような顔になる。二割ほどが睾丸炎を起こし、不妊の原因になる）に罹ったせいか、売春婦から性病を移されたせいか、「男性でも女性でもない中性」とされる。綿貫―光子の関係は正常の性愛ではないことから、光子の妊娠事件は彼女の作った嘘であることが明らかにされる。

綿貫から見れば、「子供を生んだりするのはん動物の愛で、精神的恋愛楽しむ人にはそないことやかい問題やあれへん」と考える。彼は精神的な恋愛を嗜めば、子供を産まなくて済むと言っている。これは綿貫が性的欠陥があるから、子供を作れないことの口実かもしれないが、とにかく、不妊の身体で、健全な男性と設定されていない綿貫―光子の関係は子供を作れないことになる。

作中にはまた、園子が「避妊」術を紹介する本を光子に貸したというエピソードが書かれている。園子が光子に貸

した「亜米利加で出版」した「英語の避妊法の本」には「薬剤に依る方法やら、器具による方法やら、法律に触れるようなことまでたあんと」書いてある。園子―孝太郎は夫婦生活が合わない上に、園子はまた避妊の手立てを取っている。同時に、綿貫は性的不能者である上に、光子は避妊の方法を勉強している。どれも子供を産まない要素と捉えられよう。『卍』において園子―孝太郎、園子―光子、光子―綿貫、光子―孝太郎の間の四角関係が描かれるが、時局そのものの断片的な実態も出て来る。

何せその時分は墮胎事件がやかましくて、何々博士が掴まへられた、何々病院がやられたと、ようそんな記事が新聞に生まれてん。(その十二)

ここで、言及されている「墮胎事件」は一九二六年五月下旬から六月下旬にかけて「朝日新聞」などで繰り返して取り上げられたもので、墮胎手術を受けた女性ら七十名以上が取り調べを受け、緒方病院など大阪市内の複数の病院の医師と仲介した者らが起訴された。(10)

「墮胎事件」が一九二六年の事件であることから、その当時は墮胎の取り締まりが厳しかったことはまず分かるだろう。明治以来、富国強兵政策の一環として、人口増加を国策とし、明治十三年に公布した刑法二百十二―二百十六条によって、自ら墮胎した場合は一年以下、医師などが依頼されて墮胎させた場合は三ヶ月以上五年以下の懲役、など罰則が定められた。戦前には、墮胎は一般に重い犯罪と考えられ、処罰されていた。(11)時局は墮胎や避妊などは人口増加の政策を阻害する理由から、それに違反する人を処罰する。園子は子供を産むのを拒み、法律に触れる避妊術の本を読んで、その方法で実行する。光子は友達の中川夫人が子供を産むのは嫌がっているということを口実に、園子から避妊術の本を借りた。本当は自分が子供を産みたくないために借りたものである。

『細雪』の年代から少し遡るが、資料の都合で大正末年代から昭和初年の女性の置かれた状況を当時の婦人雑誌か



ら見てみよう。商業婦人雑誌もサンガー夫人が来日前後に産児制限可否論のような記事を書いたが、以降は、實際例、方法についての記事となる。

佐久間兼信 「妊娠可能の日と不能の日」(『婦人之友』 一九二五年一〇月号)

長谷川茂治 「必ず妊娠する時期の研究」(『主婦之友』 一九二六年三月号)

岡本寛雄 「合理的な妊娠調節の実際」(『婦人世界』 一九二六年九月号)

根本豊治 「受胎機能の生理と排卵期測定による妊娠自在」(『婦人世界』 一九二六年一月号)

赤谷幸蔵 「誰にもわかる妊娠する日と妊娠せぬ日の判断法」(『主婦之友』 一九二七年二月号) (12)

一九二五年〜一九二七年には避妊法に関する記事は商業的婦人雑誌で売れ筋の記事として度々書かれる。また別冊付録として「受胎暦」「妊娠暦」が付けられ、好評の別冊と産児制限関係の記事は小冊子にされ、希望者に売られた。避妊法についての記事を掲載した雑誌が良く売れたことは、それだけ女性読者の関心事であったと考えられる。ただし、医学博士らによる避妊器具の説明は、発禁を避けるため伏せ字だらけで、本当に知りたい知識は、誌上では得られそうもなかった。女性読者は避妊法に関する知識に関心を持っている。しかし、避妊は人口増加を妨げるため、避妊器具の具体的な説明は手に入れることができなかった。『卍』はこの時期の避妊の風潮を取り入れ、「避妊」術を紹介する本を登場させた。ただし、園子の持っている避妊術の本はアメリカで出版したもので、「うまい方法」は「何ぼ通りでも書いたある」。そのため、園子は孝太郎と夫婦生活が合わないが、万一の場合に備え、詳しく書いた避妊の方法を実行し、妊娠せずに済んだ。一方、当時実際の出版物は避妊に関する避妊器具の説明が伏せ字だらけで、本当に避妊に役立つ方法が見当たらない状況であった。

『卍』には子供を産めない要素ばかりが盛り込まれている。人口増加が富国強兵政策の一環として進められていた。

「避妊」や「墮胎」は人口増加を阻害するので、「避妊」の有効かつ具体的な方法を記せば発禁となるし、「墮胎」については国家が法律をもって制限を加える。しかし、避妊や出産は、『卍』では人間の生殖行為を個人の自由に任せるように描かれている。園子、光子は従来の社会が女性に付けたモラル——出産育児と逆方向に生きていた。園子は円満な夫婦生活を送れないため、友達の光子という同性に愛を捧げている。夫の孝太郎はその同性愛関係に入り込んで、光子と肉体関係を持った。綿貫は性不能者であるが、光子と結婚するのを願っている。光子は三人の男女を思うままに操る。最後に園子、光子、孝太郎は心中を図り、結局光子と孝太郎が死に園子は生き残る。園子と綿貫はそれぞれ夫と恋人を失う。園子と孝太郎の家庭が壊れた。綿貫は光子との結婚を願っていたが、その相手が死んでしまう。園子や光子、綿貫は子供を作ろうとしないが、子供を作れる結婚と家庭というものは破滅する形で、作品は幕を閉じる。

#### 第四節 人的資源の量の低下から人的資源の量と質の低下へ

一九一七年から一九二八年までは、日本社会では産児制限運動の賛否両論が盛んに取り上げられた時代である。肯定論は女性個人への同情論、優生学的立場や経済困難者救済などの観点に立つ説である。否定論は国家的に見た場合と道徳的な立場に立つ説である。否定論は「婦人にとって最上の幸福は家族のためにも社会のためにも有益な一人でも多く作り出すことである」というような産児制限に批判的な考え方である。<sup>(1)</sup>つまり、産児制限の否定論者は国家の基礎を確保するために、多産を奨励すべきだと言っている。そのような産児制限の否定論に対し、『痴人の愛』と『卍』の両作には産児制限の肯定論に味方する要素が窺がえる。『痴人の愛』ではナオミは子供を産むことを拒否する。『卍』の「同性愛」、「肌が合わない夫婦」、「避妊」術、「不妊」の男性といった要素が織り交ぜて作られたプロットは、多産が奨励された人口政策とは矛盾している。

ナオミや光子は肉体的な魅力があり、妖艶な体は男性の情欲を引き起こしている。子供を産む条件の引き金は用意されているが、主体（ナオミ、光子）の意志によって、子供を産むのを避けている。ナオミは譲治と別々の部屋に寝るようにしている。光子は避妊の本を読んだり、園子と孝太郎に睡眠薬を飲ませて、情欲が起こらないようにしたりしている。谷崎のこの二作のヒロイン二人は、社会が女性に子供をたくさん産めという義務をよそにし、自分の意志で子供を産むかどうかを決めている。計画的に方法を実行し、個人の自由で生きている。

明治以降、富国強兵政策の一環として、人口の量的増加が国策とされた。一九二二年サンガー夫人の来日以降、産児制限運動が発展していくが、この時人口政策の流れは、まだ人口の量的増加を擁護し続けていた。一九四〇年から人口政策は人的資源の量だけでなく、人的資源の質——健全な資質を持っている国民にもこだわった。一九四〇年三月に、『国民優生法』が制定された。この法律には二つの側面があった。一方は、悪い遺伝的疾患者の子孫が増えることを阻止するための、純粋な断種法という点である。他方は、健全な者の子孫が増えることを推進する。<sup>(14)</sup> 政府は「人的資源」を活用するために、心身ともに健康な国民を求めている。一九四二年四月に厚生省人口局が「健民運動実施要綱」が実施され、母子保健の徹底は一つの課題となっている。この時期の人口政策は、健全な母親と子供を増殖させようとする。一九二二年前後の人口政策は、まだ人的資源の量を増えることを支持し続けていた。一九四〇年に人口政策は人的資源の量と質を求めるように変化した。この時代の文脈に沿って、谷崎の作品を追って見ると、同じ変化を遂げているように見える。『痴人の愛』（一九二四年）、『卍』（一九二八年）は産児の量の問題にとどまるが、『細雪』（一九四三年）は子供の量だけでなく、母親と子供の健康な素質の問題が取り上げられた。上述してきたことを表にまとめてみると、次のようになる。

『痴人の愛』  
ナオミと譲治は夫婦になるが、  
別々の部屋に寝るようにしている

『痴人の愛』  
ナオミは子供を産むことを拒否する

『世』  
園子―光子との同性愛  
夫婦生活が合わない園子―孝太郎  
光子―綿貫（性不能者）

『細雪』  
雪子・妙子の晩婚  
幸子の流産・妙子の死産  
雪子の体調変化が兆す出産の可能性  
幸子・妙子の病氣  
悦子の病氣

↓

避妊の普及を唱える産児制限運動の影響がある

↓

人的資源の量の増加への負の影響

↓

人的資源の量の増加と質の向上への負の影響

谷崎は敏感に時代の変化を作用に取り入れているということが、ひとまず捉えられるだろう。大正十年代（一九二

二年前後)の避妊の普及を唱える産児制限運動の影響は、この時期に発表された『痴人の愛』、『卍』に見られる。大正十年代から昭和十年代(一九四〇年以降)にかけて、国家は人口政策の人的資源の量の増加だけでなく、人的資源の量の増加と質の向上を唱えるようになった。大正十年代に発表された『痴人の愛』、『卍』において主人公は人的資源の量の増加にはつながらない要素が含まれている。昭和十年代前半に発表された『細雪』には『痴人の愛』、『卍』のように人口増加につながらない要素が仕掛けられるばかりでなく、人的資源の質の向上に貢献するはずの健全な母親と子供が少ない。蒔岡本家の姉鶴子と子供六人は健康な母子として登場する。しかし、作中主要舞台となる蒔岡分家では子供は悦子一人しかいないし、母親の幸子と似た体質でよく病気になる。結婚適齢期を過ぎた妙子は重い赤痢に罹ったり、死産したりすることで、健康な母子から遠ざかる。雪子は晩婚になり、結婚するとすると、健康だった体質が変化してしまう。谷崎が国家の人口政策に背を向けようとする傾向は、作中のこのような描写で説明できるのではなからうか。

谷崎は時代の人口政策の変化を言説空間に取り入れて、物語を創作している。それだけ人口政策は谷崎の創作の関心事になっているようである。しかし、現実社会の人口政策を擁護するようには見えない。作中のプロットは、人的資源の量の増加や質の向上などに反するものを仕掛けていく。では、谷崎は作中でどういう世界を作り上げようとするのだろうか。子供を産むという問題から言えば、国は女性の多産を強要していたが、『痴人の愛』、『卍』において谷崎の女主人公は、その性支配を無視している。谷崎は出産の権利を女性に握らせている。ナオミや光子、園子は子供を産むか産むまいか自ら決めて、生きていく。女性を権力のピラミッドの上位に立たせ、自分の意志で決断し、男を操るように仕立てている。『細雪』では、幸子・雪子・妙子には子供を産みたいという意志が働いている。「産めよ増やせよ」の時代に、三姉妹は子供を産みたいと願っていた。しかし、谷崎は彼女たちの願いを妨げるような設定を作り、その願望を実現させまいとする。谷崎の創作意図によって、幸子は流産するし、雪子・妙子は晩婚になるし、妙子は死産してしまう。『細雪』には、谷崎の国家の人口政策に抗おうとする傾向が一層明らかに出ていくので

はないだろうか。鶴子の生き方は当時の一般女性の生活の反映となる。しかし、姉鶴子と比べて、妹幸子・雪子・妙子三人の運命は、国家の人口政策に背を向ける軌跡になっている。

なぜ、子供を産ませないようにしているのか。谷崎には女性がきれいなままであってほしいという願いがあったのかもかもしれない。幸子の流産、妙子の死産、生まれるべき生命を失う。二人はこの体験によって、精神的にも生理的にも傷つく。流産したばかりの幸子は裏切られて、顔色は悪くなるし。陽気な幸子は死んだ子供を思い浮かべる時に、落ち込んでしまう。妙子は胎児が逆子になる時、「ずつと呻りつづけに呻つて身を悶えて」、「苦しくてはとても助からない」という状態である。死産したのを知った途端、大きな声で泣いてしまう。母親は命賭けで新しい生命を迎えようとするが、その願いが裏切られてしまうのである。花見の場では、一つの見物になるほど美しい姉妹たちは、出産の時においては、その美しさが削られる。子供を産もうとしないナオミやら、光子やら、その美しさは保たれる。女性には美しい生き物であるべきだと谷崎は考えている。

### 第五節 『細雪』における戦争ごっこ

『細雪』において、戦争のイデオロギーは子供の日常生活に浸透する場面がある。悦子は隣家のドイツ人シュトルツの子供三人、分けてもローゼマリーと仲良しになって、毎日学校から帰って来ると、彼らを庭の芝生へ誘い出して遊んだ。悦子とローゼマリーは子供を産む飯事などをするが、ペータアやフリッツが加わる時には、戦争ごっこをする。

日中は家の中で、少女たちばかりの時は飯事をし、ペータアやフリッツが加はる時は戦争ごっこをする。応接間の長椅子や安楽椅子の重いのを、四人がくりで彼方此方へ動かして繋ぎ合わせたり積み重ねたりして堡壘や特

火点を作り、空氣銃を擬してそれを攻撃する。ペータアが上官になつて号令をかけると、他の三人が一斉射撃をする。(中巻十一)

子供四人が椅子などを繋ぎ合わせたり、積み重ねたりして、戦場の堡壘や特火点の形にしようとする。年上のペータアがリーダーになつて指示を出すと、悦子らは空氣銃を擬して、射撃する。子供四人は戦場で敵をやつつける場面を、できるだけ本当らしく演じて、それぞれの役割をこなそうとする。戦場の機関銃・火砲などを備えた防御陣地を知り尽くし、堡壘や特火点を作る。この戦争ごっこは、軍隊の上官と兵士の役割を作つて、戦争場面を演じる。軍隊の上官が兵隊に指揮をとり、敵方を攻撃する役割分担を真似ようとする。彼らは電車ごっこか木登りのような遊びをしているが、詳しく描かれていない。子供は、大人の社会生活を真似しながら、それを自分のものとしていく。戦争に関する話を学校や家庭で見聞きすると、好奇心を持つのは自然なことだろう。そのため、悦子らは戦争ごっこで殺人の模倣をし、戦争のスリルやスピードを楽しんでいて、戦争ごっこを好んでやっている。

ドイツの少年たちは、まだ小学校へも行かないフリッツのような幼児まで、必ず敵のことを「フランクライヒ」と言う。この「フランクライヒ」はドイツ語で「フランス」ということである。第二次世界大戦でドイツ、イタリアと日本は同盟し、イギリス、フランス、ソビエト連邦、アメリカ、中華民国などの連合国陣営との間で戦つた。フランスはドイツ人にとって、敵だとされる。幸子はドイツの少年がフランスのことを敵だということから、「独逸人の家庭の驕方」と思いやつた。シュトルツ夫人は、まだ小学校へも行かないフリッツにまで、フランスは敵だと教え込む。子供は身の回りに起きていることを遊びに取り込んでいく。

この戦争ごっこによつて、西洋間の家具の飾りつけが「始終滅茶々々」にされるのには、幸子は「少からず迷惑」に感じた。突然の来客があれば、女中たちはまず訪問客を玄関に待たせて置いて、総掛りで戦争ごっこの堡壘や特火点を片付けなければならないのだ。ある時、シュトルツ夫人は、ペータアやフリッツが遊びに行くと、蒔岡家西洋間

の部屋が滅茶々になった様子を見て呆れた。シュトルツ夫人は呆れた様子を見せたものの、幸子の目には彼らの「跋扈跳梁ぶりは一向改まる様子も」なかった。幸子は子供が戦争ごっこをしていて、家具を散らかすのを不愉快に思っている。ドイツ人の家庭では、思想のかたまらない子供に戦争のことを躉けるのである。シュトルツ夫人は敵のこととか、堡壘や特火点の仕組みとかをペータアやフリッツに教え、反フランス感情を高揚させ、戦争ごっこでフランスを討つことを扇動していたと思うしかない。この戦争ごっこから、次第に軍事色を強めつつあった一九三八年に、軍国主義が子供の日常の遊びまで染み込んだことを窺わせる。

谷崎は軍国主義そのものを嫌悪しているのである。谷崎の軍国主義批判が最も端的に表れている文章を二つ続けて見てみよう。それは「春風秋雨録」（一九〇三）と「所謂痴呆の藝術について」（一九四八年）である。

谷崎は一九〇三年に「春風秋雨録」で、軍人が他人の生命を奪うのは最も嫌いと言った。「われ幼きより、最も嫌ひしは軍人にて（中略）たとへ名声を世界にふるひ、功名を天下に立つとも、他人の生命を奪ひ、刃をふるひて血を流すは、これをしも人道にかなへりとやいはむ」と書いた。軍人の跳梁跋扈を許すのは軍国主義と同じだ。谷崎は軍国主義が自分の利益のために、他人の生命を無視し、平気で殺戮をするのを嫌っていた。罪のない人々に銃口を向ける行為を非人道だと批判した。

谷崎は一九四八年には『新文学』の八月号・一〇月号に「所謂痴呆の藝術について」を発表した。「所謂痴呆の芸術について」は辰野隆があまり義太夫の悪口を書くので、山城少掾から反駁文を書いてほしいと頼まれた書き出しが、結局は辰野に味方するようになってしまったという一篇である。谷崎は「蓼喰ふ虫」で文楽に魅了される主人公を描いたが、義太夫を全面的には受け入れることができなかった。義太夫は戯曲の本来の筋から離れて、不必要なまでに血腥い場面を展開する。義太夫は変に残酷な場面を描くことを好み、血を見なければ承知しないといった趣は、どうも谷崎の癪に触る所である。戦争中、軍閥政府は文学芸術に不当な圧迫を加える一方、「野蛮で、愚昧で、而も不愉快」な場面を扱った義太夫の時代物と人形浄瑠璃と一部の歌舞伎劇を大いに奨励した。『細雪』を書く時に、弾圧を受けて



きた谷崎は、軍閥政府のやり方を不満に感じたのではなからうか。

谷崎は無遠慮で露骨に自分の軍閥政府への憎悪を「所謂痴呆の芸術について」で打ち明けた。軍閥政府の「人命の重んずべきを知らないところ、非人間的な残忍性」という「特徴」に嫌悪を覚えていた。「義太夫を聴くと軍閥政府の野蛮性を思い出し、あの当時の国民全体の馬鹿さ加減を思い出して、一層厭な気がする」という。谷崎は、義太夫芸術世界に潜む軍閥政府の野蛮性、非人間的な残忍性を暴き出している。これは谷崎作品の最大のからくりを読み解く手がかりとなるだろう。戦争中軍閥政府は自分の都合のいいように、義太夫などの芸術を認めるが、ほかの文学芸術に不当な圧迫を与えた。軍のいう「緊迫した戦時下」という非常時に当たって、「個人主義的な女人の生活をめんめんと書き連ねた」「細雪」を連載中断せしめた。軍閥政府を「あらゆる文学芸術に不当の圧迫を加えるほか能のなかった」と手厳しく批判した。

戦前の言語空間は『新聞紙法』、『出版法』によって規制され、総動員体制が強化されるに従ってより一層恣意性を強めた行政指導は、編集者に圧力をかけて自由な表現を封じ込めたのであった。戦後GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の支配下、日本国憲法に言論の自由を保障すると明記されたが、プレスコードなどによる言論統制・弾圧は行われたものの、国体や天皇を取り巻く批判は認められた。谷崎も戦後の時代の波に乗って、軍国主義への批判・風刺を明らかにした。戦前の軍閥政府は義太夫のような「国粹芸術」を道具とし、当時の国民の行動規範を最高価値への献身によって、ほかのすべてを無視できるというように統一させようとしていた。

而も寺子屋などは最も代表的な傑作とされているもので、敗戦前には国語の教科書にさえ載っていたことがあったのである。

小中学校や女学校の先生たちが、年齒も行かない少年少女たちを引率して文楽などへ「国粹芸術」の見学に行

くなども如何であろうか。すでに痴呆の芸術であるからには、思想のかたまらな子供たちに無条件で見せてよい筈はなく、(中略)またそうでもなく、あゝ云うものから誤った義理人情や犠牲的精神を教え込まれても困ると思ふ。

軍閥政府は「義理人情や犠牲的精神」の性格を称揚する義太夫芸術を媒介として、国家の絶対性を導こうとする。義太夫芸術は主君のために、我が身を始め、妻子眷属の生命をも犠牲に供するような「武士道的精神」を醸し出す。寺子屋を扱った国語の教科書や「国粹芸術」の見学を通して、「義理人情や犠牲的精神」を国民へ浸透させる。このような「義理人情や犠牲的精神」の不断のウルトラ化によって戦争を醸成する気分が生まれたのである。戦争中、忠孝の志を持つ戦士が「忠義に凝って殺人鬼」になった。軍閥政府の気に入った義太夫の「これらの台辞は、忠義に凝って殺人鬼になった人間の言葉としか受け取れず、いかに聊かの良心の苛責も感じないと云う」ことに、谷崎は「たゞ呆れるより外はない」と書いた。主君のために、人を殺しても忠義に凝った烈士と褒美され、「良心の苛責も感じ」ず、世間から非難を受けないということは谷崎を驚かせる。谷崎はその時代の歪んだ価値観をもたらした軍閥政府を激越な調子で罵倒した。

軍国主義国家は戦争の暴力性と野蛮性を子供に教え込む。「年齒も行かない少年少女たち」に「あゝ云うものから誤った義理人情や犠牲的精神を教え込まれても困ると思ふ」谷崎は、その時代の価値や規範から逸脱する一人と言えよう。産まれてくる子供は国家権力に徴兵されたり、人を殺戮することを教えられたりして、軍国主義者の道を突き進んでいく。国のために血を流せというのを美談とした時代に産まれた子供は軍国主義に奉仕してしまう。谷崎は軍国主義を嫌悪していたため、『細雪』の世界で女性に子供を産ませないのではないか。軍国主義社会の求めた健康な子供は『細雪』の主要舞台になる分家には存在しない。人口政策を否定するような要素を盛り込んで、軍国主義国家の有り様から逸脱するのである。

## 第六節 国家による性支配から逃れて

谷崎潤一郎は『細雪』をはじめ、『卍』、『痴人の愛』に子供を産めない／産まないプロットを織り交ぜた。国家の人口政策が人的資源の量的拡大に加え、質的深化に移行するのに伴って、『痴人の愛』、『卍』から『細雪』まで、同様の変化が察せられる。『痴人の愛』、『卍』は産児制限運動の影響があり、子供を産む――人的資源の量を増やす要求から離れる物語として見ることができそうである。『細雪』では六人の健康な子供のいる本家と、不健康で子供が一人しかいない分家と対比しながら、主要舞台となる分家の母親たるもの幸子・妙子は病に近いものとして描かれる。そして、健康だった雪子は結婚に至って、しつこい下痢に罹る描写で作品が閉じられる。分家の者は子供を産みたい・健康でありたいと願っているが、谷崎はそれを認めることなく流産・死産・病ばかりを彼女らに仕掛けていく。分家の女性の結婚と出産と健康は、人的資源の量と質が求められている時代背景から遠ざかる。谷崎は軍国主義国家が子供に犠牲精神を提唱したり、戦争の暴力性と野蛮性を美化したりして、戦争を扇動するのを嫌悪している。よって、谷崎は人的資源の量と質に関わるものにマイナスの要素を盛り込み、軍国主義の求めている兵力の量と質と異なる言語空間を仕上げようとしたのではなからうか。

### 注

(1) 畑中繁雄「『生きてゐる兵隊』と『細雪』をめぐって」(『文学』第二九卷第十二号 一九六一年十二月)、九七頁に拠る。

(2) 橋本芳一郎「町人文学としての谷崎文学(五)――谷崎論への一つのアプローチ」(『駒澤国文』第一九卷 一九八二年)

二月)、五二頁に拠る。

(3) 鈴木貞美『人間の零度、もしくは表現の脱近代』(河出書房新社 一九八八年四月)、八九〜九五頁に拠る。

(4) 丸川哲史「『細雪』試論」(『群像』第五二巻第六号 一九九七年六月)

(5) 女性学研究会(編)『女の目で見る』(勁草書房 一九八七年二月)、一九〇頁〜一九六頁に拠る。

(6) 山本宣治『山本宣治全集』第三巻(汐文社 一九七九年四月)、六八八頁〜六八九頁に拠る。

(7) 前掲注(5)に同じ。

(8) 近代女性文化史研究会(編)『大正期の女性雑誌』(大空社 一九六六年八月)「婦人雑誌にみる産児問題——明治から昭和へ」という章の一〇七頁に拠る。

(9) 前掲注(8)に同じ。内容は九五頁〜一〇九頁に参照。

(10) 『卍』の新潮文庫版の注(二〇一一年五月 百九刷)、二四八頁に拠る。

(11) 前掲注(10)に同じ。

(12) 前掲注(8)に同じ。引用は一一〇頁に拠る。

(13) 前掲注(8)に同じ。内容は一〇二頁〜一〇五頁に参照。

(14) 近藤弘美「優生法にみられる日本人の倫理観」(『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』第九

号 二〇一三年三月)、九二頁に拠る。

おわりに

本論文では時代背景を踏まえて、『細雪』、『卍』、『痴人の愛』における女性のライフイベントとライフスタイルを論じてきた。女性の肉体美と官能的な素材を扱う谷崎潤一郎の試みは「マゾヒズム」によるものと片付けられ、谷崎文学の政治的な側面は曖昧なままにされ続けてきた。谷崎文学は、女性拝跪の文学であり、「無思想性」なるレッテルが貼られてきたのである。

確かに、女性の結婚や出産、生活ぶりに焦点を当ててみると、『細雪』の作中には現実から逃れた世界が築かれているように捉えられよう。『細雪』において、蒔岡本家が「早婚多産」の社会状況に従い、姉鶴子が子供六人を産み、「節約質素」な生活を送った。一方、分家では「早婚多産」に同調しないような雪子・妙子の晩婚、幸子の流産・妙子の死産の上に、上流階層の優雅で贅沢な生活を送る構成が設定された。国の政策「物資節約」を擁護する本家は最後に困窮へと向かう。それに対して、贅沢な生活を送ってきた分家は却って家運が上る。蒔岡両家の結末からアイロニーが察せられるだろう。『細雪』の世界で、国の政策に従う者は落魄してしまう。

『細雪』における出産にまつわるプロットを五つ取り上げた。鶴子の多産、飯事遊び、幸子の流産、妙子の死産、飼い猫の多産という出産に関わる五つの事件は作品内で対比されたり、構造化されたりするように配置されている。悦子の子供を産むという飯事遊びは子供を次々と簡単に産めたが、幸子は流産するし、妙子は死産してしまう。しかも、二人は子供の死により多大な苦痛を覚えた。国は多産を女性に強要したが、女性の肉体的・精神的損失に目を配らなかつた。谷崎が猫の多産と妙子の死産を同時に下巻三十七に書いたのは、為政者が女性を野生動物と同一視する誤謬に陥ったことを風刺する意図を暗示していると言つてよからう。

健康が強制された時代に、『細雪』において病気が頻繁に出てきた。姉鶴子とその子供六人は健康な母子として描かれているが、幸子と娘悦子、妙子と恋人たちは病に近い存在である。健康な雪子は悦子・妙子の看病に尽くし、優れ

た体質が強調される。一方、雪子の見合い相手に不健康・不健全な者が多いため、早い結婚は叶わなかった。健康な夫に恵まれると、雪子の健康な体質が変化してしまう。三姉妹は姉と相違し、社会の求めている健康な国民から離れた存在として描かれている。谷崎は病的な女性を作りながら、妙子のような多数の男と関係を持つ「不健康」な女性は美ではないと考える。雪子は弱々しいが、清浄であるため、女性美を完結するのである。

国家の人口政策が人的資源の量的拡大に加え、質的深化に移行するのに伴って、『痴人の愛』、『卍』から『細雪』まで、同様の変化を遂げているように見ることができそうである。『痴人の愛』、『卍』は子供を産む——人的資源の量を増やす要求から離れる物語として捉えられよう。『細雪』では六人の健康な子供のいる本家と、不健康で子供が一人しかいない分家と対比しながら、主要舞台となる分家では、母親たるもの幸子・妙子は病に近いものとして描かれる。そして、健康だった雪子は結婚に至って、しつこい下痢にかかる描写で作品が閉じられる。分家の女性の結婚・出産・健康状況は同時代の求めた人的資源の量と質から遠ざかる。

蒔岡本家と分家は常に結婚・出産・生活ぶり・健康状況において、奇妙な対比をなしている。『細雪』のテキストと「早婚多産」を強い、「贅沢は敵だ」と唱え、「健康報国」を強制する昭和十年代の状況と照らし合わせると、『細雪』が反時代的な性格を持っていることが顕在化してきたのではなからうか。谷崎は軍国主義の暴力性と野蛮性を嫌悪しているため、軍国主義の求めている人口資源の量と質と異なるものを『細雪』に仕組んだと言つてよいのである。

二〇一四年十一月二十五日に、谷崎潤一郎と『細雪』の四姉妹のモデルとなった妻・松子、松子の妹・重子の間で交わされた未公開の手紙二百八十八通が見つかったという報道があった。未公開書簡は谷崎の作品と深い関わりがあるか、否か興味深いところである。今後は未公開の手紙や、『細雪』以降の作品群を視野に置きながら、谷崎の社会批評性を中心に、検証したいと考える。

一行五〇字、一頁二〇行、一頁あたり一〇〇〇字、四〇〇字換算 二〇〇枚

五〇字×二〇行×八〇頁÷四〇〇字＝二〇〇枚

【参考文献】 ☆は引用文献

単行本

〈昭和十年代時代背景関連〉

☆穂積重遠『結婚訓』（中央公論社 一九四一年十月）

藤田省三『天皇制国家の支配原理』（未来社 一九六六年七月）

☆近代女性文化史研究会（編）『大正期の女性雑誌』（大空社 一九六六年八月）

☆立川昭二『病気の社会史 文明に探る病因』（日本放送出版協会 一九七一年十二月）

☆山本宣治『山本宣治全集』第三卷（汐文社 一九七九年四月）

☆『国勢調査集大成 人口統計総覧』（東洋経済新報社 一九八五年十月）

☆女性学研究会（編）『女の目で見える』（勁草書房 一九八七年二月）

☆藤野豊『強制された健康 日本ファシズム下の生命と身体』（吉川弘文館 二〇〇〇年八月）

☆歴史教育者協議会（編）『学びあう 女と男の日本史』（青木書店 二〇〇四年十月）

〈その他〉

☆笠原伸夫『谷崎潤一郎——宿命のエロス』（冬樹社 一九八〇年六月）

☆鈴木貞美『人間の零度、もしくは表現の脱近代』（河出書房新社 一九八八年四月）

小森陽一『へゆらぎ』の『日本文学』（日本放送出版協会 一九九八年九月）

細江光『谷崎潤一郎 深層のトリック』（和泉書院 二〇〇四年三月）

尾高修也『壮年期 谷崎潤一郎』（作品社 二〇〇七年九月）



千葉俊二ほか(編)『谷崎潤一郎 境界を越えて』(笠間書院 二〇〇九年二月)  
酒井直樹ほか(編)『「近代の超克」と京都学派』(国際日本文化研究センター 二〇一〇年十一月)

## 論文

### 〈『細雪』病氣・出産関連〉

- ☆東郷克美 「『細雪』試論——妙子の物語あるいは病氣の意味」(『日本文学』第三四卷第二号 一九八五年二月)  
☆平野芳信 「『細雪』再論：西洋と日本のはざままで」(『日本文芸論集』第一五卷 一九八六年十二月)  
☆村瀬士朗 「代謝する身体の物語——生命現象としての「細雪」」(『国語国文研究』第八七号 一九九〇年十二月)  
☆中沢千磨夫 「時間の病い／癒しの時」(『国語国文研究』第八七号 一九九〇年十二月)  
☆村瀬士朗ほか 「討論(「細雪」——病いの時空へシンポジウム)」(『国語国文研究』第八七号 一九九〇年十二月)  
☆丸川哲史 「『細雪』試論」(『群像』第五二巻第六号 一九九七年六月)

### 〈『細雪』反時代関連〉

☆橋本芳一郎 「町人文学としての谷崎文学(五)：谷崎論への一つのアプローチ」(『駒澤国文』第一九巻 一九八二年二月)

☆東郷克美 「戦争とは何であつたか——「細雪」成立の周辺——」(『国文学 解釈と教材の研究』第三〇巻第九号 一九八五年八月)

☆渡辺直己 「『細雪』と八月十五日」(『新潮』第八六巻第一号 一九八九年一月)

小森陽一・蓮實重彦 「谷崎礼讃——闘争するディスクール」(『国文学・解釈と教材の研究』第三八巻第十四号 一

九九三年十二月)

☆清水良典「文と陰翳——「細雪」と近代の闘争」〔『群像』第四九卷第十一号 一九九四年十一月〕

渡辺直己・小森陽一「植民地」体験としての天皇制 日本近代小説「敗北」の歴史」〔『世界』第六七三号 二〇〇〇

年四月〕

☆柴田勝二「表象としての（現在）——『細雪』の寓意——」〔『日本文学』第四九卷第九号 二〇〇〇年九月〕

☆小泉浩一郎「谷崎文学の思想——その近代天皇制批判をめぐって——」〔『国語と国文学』第七八卷第三号 二〇〇一年三月〕

☆たつみ都志「『細雪』の生きられた時間と空間」〔『国文学解釈と鑑賞』第六六卷第六号 二〇〇一年六月〕

☆尾上潤一「『細雪』とともに——戦中戦後の谷崎潤一郎「壮年期——谷崎潤一郎論」その七」〔『日本大学芸術学部紀要』

第三九卷 二〇〇四年三月〕

☆川本三郎「『細雪』とその時代 迫り来る戦争の影」〔『中央公論』第一二二卷第六号 二〇〇七年六月〕

#### 〈昭和十年代人口政策関連〉

広嶋清志「現代日本人口政策史小論——人口資質概念をめぐって（一九一六年—一九三〇年）」〔『人口問題研究』第一五四号 一九八〇年四月〕

広嶋清志「現代日本人口政策史小論（2）——国民優生法における人口の質政策と量政策——」〔『人口問題研究』第一六〇巻 一九八一年十月〕

☆近藤弘美「優生法にみられる日本人の倫理観」〔『比較日本学教育研究センター研究年報』第九号 二〇一三年三月〕

#### 〈その他〉

丸野弥高「細雪と源氏物語」〔『国文学解釈と鑑賞』第一八卷第八号 一九五三年八月〕

☆畑中繁雄 「『生きてゐる兵隊』と『細雪』をめぐる」 (『文学』第二九卷第十二号 一九六一年十二月)

千葉俊二 「谷崎潤一郎『細雪』の雪子」 (『国文学 解釈と教材の研究』第二五卷第四号 一九八〇年三月)

☆東郷克美 「作家のモチーフ・意図の推定——『細雪』を例として」 (『国文学 解釈と鑑賞』第四六卷第十二号 一

九八一年十二月)

高田瑞穂 「細雪」 (『国文学 解釈と鑑賞』第四八卷第八号 一九八三年五月)

千葉俊二 「『細雪』論」 (『国文学 解釈と鑑賞』第五二卷第四号 一九八七年四月)

野村圭介 「細雪四姉妹」 (『早稲田商学』第三三七号 一九九〇年三月)

塚本康彦 「細雪」 (『国文学 解釈と鑑賞』第五七卷第二号 一九九二年二月)

中村邦夫 「『細雪』の語りと表現」 (『表現研究』第六〇号 一九九四年九月)

山口仲美 「谷崎潤一郎『細雪』の表現——『源氏物語』の影響」 (『表現研究』第六〇号 一九九四年九月)

佐藤淳一 「『生活の定式(じようしき)』と美意識——谷崎潤一郎『細雪』の表現形式の分析から」 (『国語と国文学』4

第八一巻第七号 二〇〇四年七月)

川本三郎 「モダンガールの四女、妙子」 (『中央公論』第一二二巻第十号 二〇〇六年十月)

☆千葉俊二 「谷崎潤一郎『細雪』の時間」 (『国文学 解釈と鑑賞』第七三巻第二号 二〇〇八年二月)

小泉浩一郎 「谷崎文学の思想——『痴人の愛』を中心に——」 (『成城国文学』第二六号 二〇一〇年三月)